

新しい 「ミサの式次第と 第一～第四奉献文」 の変更箇所

2022年11月27日（待降節第1主日）からの実施に向けて

日本カトリック典礼委員会



日本カトリック典礼委員会

新しい
「ミサの式次第と第一～第四奉献文」
の変更箇所

2022年11月27日(待降節第1主日)からの実施に向けて

カトリック中央協議会

表紙図版

ローマ典文（現在の第一奉献文）冒頭の“Te igitur”のページ
（「ティニエツの秘跡書」より、11世紀、ケルン）

出版にあたって

教皇庁典礼秘跡省は、第二バチカン公会議の『典礼憲章』（1963年）に基づき、トリエント公会議（1545～1563年）以降、約400年にわたって使用されてきたラテン語の典礼書の改訂作業に着手し、儀式ごとに順次、新しいラテン語規範版を公布してきました。典礼秘跡省から、全世界のカトリック教会のために典礼書の規範版がラテン語で発行される伝統は、今日も続けられています。

同時に『典礼憲章』は、典礼分野におけるインカルチュレーション（文化内開花・文化変容）への道を切り開き、ラテン語規範版を翻訳して各国語で典礼を祝うだけでなく、それぞれの集団、地域、民族への正当な多様性と適応の余地を残しました（『典礼憲章』36～40）。その際、使用されるラテン語規範版の式文の国語訳および規範版とは異なる典礼の多様性と適応の導入については、ローマ典礼様式の本質の一致を保っていくために、その地域の教会権威者（司教団）によって認可され、典礼秘跡省からの認証を受ける手続きが必要となっています（『典礼憲章』22、36、38、「教会法」838条参照）。

第二バチカン公会議後の典礼刷新を受けて改訂された『ローマ・ミサ典礼書（*Missale Romanum*）』ラテン語規範版の初版（1970年）は、すでに2回改訂されています（1975年、2002年）。そのラテン語規範版第2版（1975年）に基づく日本語版『ミサ典礼書』（1978年）の翻訳・改訂作業については8頁以下を参照してください。

ラテン語規範版第3版に基づく今回の改訂作業では、先に「ローマ・ミサ典礼書の総則」が日本における適応を含めて全面的に見直され、2014年5月に典礼秘跡省から認証を受けました（Prot. N. 147/14）。これに伴い、とくにミサの所作に関連して早期に実施しても混乱を招かないと思われる変更箇所早く慣れていただくために、2015年11月29日（待降節第1主日）から、現行の日本語版『ミサ典礼書』の式文を用いながら、「ローマ・ミサ典礼書の総則」改訂訳に合わせてミサを実施する措置を取ることになりました。これは、規範版第3版に基づくミサへの移行の第一段階ということができます。

一方、式文の改訂作業にあたっては、ミサをささげる際に中心となる「ミサの式次第と第一～第四奉献文」、ならびに「ミサの結びの祝福と会衆のための祈願」、

「水の祝福と灌水式」が先に進められ、典礼秘跡省に提出されました。そして同省との度重なる協議を経て、ようやく2021年5月23日（聖霊降臨の祭日）に認証を受け、すぐに使用する許可も与えられました（Prot. N. 148/14）。そのため日本の教会では、2022年11月27日（待降節第1主日）から新しい式文を用いてミサを実施することを、日本カトリック司教協議会2021年度第1回臨時司教総会（7月開催）において決定しました。これは、規範版第3版に基づくミサへの移行の第二段階ということができます。

2022年11月27日からの実施にあたっては、今回、認証を受けた式文と一緒に、未公表であった「ローマ・ミサ典礼書の総則」改訂訳を掲載して、司式者用の儀式書を発行する予定です。本書は、司式者用儀式書に先立って、事前に新しい式文の変更箇所について説明し、ご理解いただくために発行されるものです。とくに司牧者の皆様には、変更箇所を把握して、すべての奉仕者と会衆のかたがたに変更の理由や意味などを伝える司牧的な配慮をお願いいたします。

これに加えて、以下のような措置が取られることにも留意していただきたいと思えます。

- ①改訂作業が終わっていない公式祈願、叙唱、入祭唱、拝領唱等については、現行の『ミサ典礼書』の式文を用いる。ただし、叙唱の導入となる対話句（「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」…）は典礼秘跡省から認証を受けた「ミサの式次第」に含まれているため、本冊子に掲載されているものを用いる（35頁以下参照）。なお、現在、現行の『ミサ典礼書』に掲載されている公式祈願とともに選択的に試用されている公式祈願も引き続き用いることができる。
- ②公式祈願の結びの定句に関しては、日本カトリック司教協議会2021年度第1回臨時司教総会（7月開催）において認可されたものを暫定的に用いる（13頁以下参照）。そのため、『毎日のミサ』（カトリック中央協議会発行）に、2022年11月27日の待降節第1主日から、公式祈願の新しい結びの定句（暫定訳）を掲載する。他の儀式書に掲載された公式祈願もこれに準じる。現行の『教会の祈り』の結びの祈りで祈願がキリストに向かっているもの（第4月曜日の「晩の祈り」と水曜日の「寝る前の祈り」）も同様の対応とする。
- ③改訂作業が終わっていない聖週間の典礼などについても、今回、典礼秘跡省から認証を受けた式文を除いて、現行の『ミサ典礼書』の式文を用いる。
- ④他の儀式書に「ミサの式次第と第一～第四奉献文」が含まれている場合、

2022年11月27日以降は、原則として該当箇所を新しい式文に置き換えて使用する。

⑤新しい「ミサの式次第と奉献文」の歌唱のために、現行の『ミサ典礼書』の式次第と奉献文の旋律（『典礼聖歌』201番と『ミサ典礼書』巻末〔16〕～〔27〕頁）を用いることができるよう準備する（10頁参照）。

⑥ミサの賛歌に関しては、新しい翻訳に合わせたものとして、まず日本カトリック典礼委員会の典礼音楽担当部門によって整えられる旋律を使用することができるよう準備する。ただし、歌唱する場合には、『典礼聖歌』203～229番のミサの賛歌を用いることもできる（24頁参照）。

⑦信仰宣言のためには、2004年に認可された新しい口語文に、日本カトリック典礼委員会の典礼音楽担当部門が整え、2016年に認可された旋律を用いる。

なお、現行の『ミサ典礼書』の全体的な改訂作業は、規範版第3版に基づいて今後も続けられていきますが、すべての式文や祈願の新しい翻訳が完成し、一巻にまとめられて出版されるまでには、今しばらく時間が必要です。それまでの間、今後発行される司式者用の儀式書や主日・週日のミサのための冊子を併用しながらミサを行うことになるため、種々の面での不自由さや混乱が予測されます。こうした困難を乗り越えていただくために、本冊子が皆様のお役に立つことを願っています。2022年11月27日（待降節第1主日）から開始される規範版第3版に基づくミサの実施に向けた移行の第二段階のために、皆様のご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

2021年8月15日 聖母の被昇天の祭日に

日本カトリック典礼委員会
委員長 白 浜 満

目次

出版にあたって……………3

1. 改訂作業の経緯と改訂版の実施……………8
2. 改訂の基本方針……………11
3. 式文の唱え方の区別……………12
4. 公式祈願の結びの定句……………13

ミサの式次第と第一～第四奉献文

～改訂された式文および典礼注記とおもな改訂箇所解説～……………15

開祭……………15

ことばの典礼……………26

感謝の典礼……………32

奉献文（エウカリスティアの祈り）……………35

第一奉献文（ローマ典文）……………37

第二奉献文……………47

第三奉献文……………53

第四奉献文……………60

交わりの儀（コムニオ）……………67

閉祭……………73

ミサの結びの祝福と会衆のための祈願……………76

荘厳な祝福……………76

会衆のための祈願……………86

水の祝福と灌水……………91

1. 改訂作業の経緯と改訂版の実施

日本語版『ミサ典礼書』の改訂作業の経緯

第二バチカン公会議の典礼刷新を受けて改訂された『ローマ・ミサ典礼書 (*Missale Romanum*)』のラテン語規範版の初版は、1970年に教皇庁典礼聖省(当時)によって発行されました。このラテン語規範版の初版はさらに改訂が加えられ、1975年に第2版が発行されました。現行の日本語版『ミサ典礼書』は、この1975年に発行されたラテン語規範版第2版に基づいて準備され、1978年12月に発行されました。この日本語版は規範版の全訳ではなかったため、典礼聖省からは暫定的な認証を受けて使用されることとなりました。

発行から10年が過ぎた1988年以降、日本カトリック典礼委員会が主催した教会管区ごとの典礼研究会や全国典礼担当者会議などを通じて、日本語版『ミサ典礼書』に対するさまざまな意見や要望が寄せられました。また、1994年には日本カトリック典礼委員会のもとに3つの研究部会(式次第、叙唱・奉献文、公式祈願)を設置し、将来の本格的な改訂に向けた準備を始めました。

そして、2000年6月に正式に『ミサ典礼書』改訂委員会の発足が承認され、改訂作業に取りかかりました。その後、2001年3月に典礼秘跡省から典礼式文の翻訳に関する指針『リトゥルジウム・アウテンティカム (*Liturgiam authenticam*)』が公布され、規範版に忠実な翻訳が求められたこと、さらに2002年3月には『ローマ・ミサ典礼書』規範版第3版が発行されたことを受けて、すでに改訂を進めていた部分も含めて、この改訂作業全体を見直すこととなりました。

改訂作業は、規範版の膨大な量の式文すべてを翻訳してから典礼秘跡省に提出するのではなく、ミサの主要部分である「ミサの式次第と第一～第四奉献文」、ならびに式次第とともに用いる可能性のある「ミサの結びの祝福と会衆のための祈り」と「水の祝福と灌水」から始められました。そして、2006年4月にこれらを典礼秘跡省に提出し、文書によるやりとりだけでなく同省を直接訪問し、長官や次官などと式文の日本語訳に関するさまざまな課題について協議を重ねてきました。

2017年9月には教皇フランシスコが自発教令の形式による使徒的書簡『マニウム・プリンチピウム (*Magnum principium*)』を公布して「教会法」第838条を改訂し、各司教協議会には典礼式文の翻訳を承認する役割および責任があり、典礼秘跡省はそれを認証することが明確にされました。これによって、典礼式文の翻訳の認

証に至るまでの手続きに改善がみられ、今回の認証へとつながりました。以下は、認証までの歩みの概要です。

- 2000年6月 日本カトリック司教協議会定例司教総会（以下「定例司教総会」と表記）で『ミサ典礼書』改訂委員会の発足を承認
- 2005年12月 日本カトリック司教協議会特別臨時司教総会で「ミサの式次第と第一～第四奉献文」改訂版を承認
- 2006年2月 日本カトリック司教協議会臨時司教総会（以下「臨時司教総会」と表記）で「ミサの結びの祝福と会衆のための祈り」と「水の祝福と灌水」の日本語訳を承認
- 2006年4月 典礼秘跡省に「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等を提出
- 2006年5月 典礼秘跡省が「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等に対する「所見」を送付
- 2007年2月 臨時司教総会で「ミサの式次第と第一～第四奉献文」改訂版の試用（2月末～4月末）を承認
- 2007年6月 定例司教総会で「ミサの式次第と第一～第四奉献文」の修正箇所を承認
- 2007年9月 典礼秘跡省に「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等を再提出
- 2007年12月 アド・リミナ（各国司教団が数年おきにローマを訪問し、教皇に謁見して各国・各教区の状況を報告するもの）の期間中に日本司教団が典礼秘跡省を訪問し、同省長官F・アリンゼ枢機卿と意見交換
- 2008年6月 定例司教総会で典礼秘跡省から指摘された箇所の改訂訳を承認
- 2014年3月 「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等、「ローマ・ミサ典礼書の総則」改訂訳を再提出
- 2014年5月 典礼秘跡省が「ローマ・ミサ典礼書の総則」改訂訳を認証（Prot. N. 147/14）
- 2015年3月 アド・リミナの期間中の教皇フランシスコと日本司教団との意見交換の際に典礼書の翻訳をめぐる問題について言及し、さらに典礼秘跡省を訪問して同省次官A・ローチ大司教と意見交換
- 2015年10月 典礼秘跡省が「ミサの式次第と第一～第四奉献文」に対する「所見」を送付

2015年11月	「ローマ・ミサ典礼書の総則」改訂訳の変更箇所の一部を実施
2019年7月	2015年10月の典礼秘跡省による「所見」に対する返答を送付
2021年5月	典礼秘跡省次官 A・ローチ大司教と典礼委員会委員長白浜満司教が「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等の認証について協議
2021年5月	「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等の最終版を典礼秘跡省に送付
2021年5月	5月23日（聖霊降臨の祭日）付で典礼秘跡省が以下の式文の日本語訳を認証（Prot. N. 148/14）
	<ul style="list-style-type: none"> ・ミサの式次第と第一～第四奉献文 ・ミサの結びの祝福と会衆のための祈り ・水の祝福と灌水

なお『ローマ・ミサ典礼書』規範版には上記のほか、季節固有の典礼、公式祈願、叙唱、入祭唱・拝領唱など多くの式文が掲載されています。これら残りの式文の翻訳作業も順次行われ、典礼秘跡省に提出する準備が進められています。

「ミサの式次第と第一～第四奉献文」改訂版等の実施に向けて

このたび認証された「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等を用いてミサをささげるために、ミサを司式する司教や司祭のみならず、助祭や信徒の奉仕者、そして会衆も、改訂の理由や背景などの理解を深めることが大切です。そのために本書が準備されました。

歌唱ミサのための旋律は、『典礼聖歌』201番ならびに『ミサ典礼書』の巻末に掲載されている旋律が用いられてきました。今回の改訂に伴い、これらの旋律も一部を修正することになりました。また、現行の「ミサの式次第」には掲載されていない式文が加わるので、この部分を歌唱するためには新しい旋律が必要となります。こうした修正や作曲の作業も、現在少しずつ進められています。

このように、「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等の実施までには十分な準備期間が必要となるため、**実際の実施は2022年11月27日（待降節第1主日）からと**することが、日本カトリック司教協議会2021年度第1回臨時司教総会（7月開催）で承認されました。

2. 改訂の基本方針

現行『ミサ典礼書』の改訂作業は、以下の基本方針に基づいて行われています。

- 1 『ローマ・ミサ典礼書』規範版第3版（2002年）に基づいて、日本語版『ミサ典礼書』（1978年、暫定認証）を完成させる。

すでに説明したように、日本語版『ミサ典礼書』は暫定的に認証され、今日まで使用されています。そのため、規範版第3版を全訳し、典礼秘跡省から正式な認証を受ける必要があります。

- 2 典礼式文の翻訳に関する指針『リトゥルジウム・アウテンティカム』（2001年）が求める原文に「忠実な翻訳」を目指す。
 - ・日本語の特性から「忠実な翻訳」が難しい場合は必要な適応を行う。
 - ・現行『ミサ典礼書』発行後の典礼用語や式文の翻訳表現に合わせる。

指針『リトゥルジウム・アウテンティカム』はラテン語規範版に忠実な翻訳を求めています。今回の改訂ではこの指針に従い、現行『ミサ典礼書』の式文と典礼注記を可能なかぎり規範版に合わせるようにしました。しかし、ラテン語に忠実に訳しても式文として唱えるためにはふさわしくないとされた箇所は、日本のための適応を行いました。また、1978年に現行『ミサ典礼書』が発行された後、さまざまな儀式書をはじめ、『新教会法典』、『カトリック教会のカテキズム』、『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』、『教会の社会教説綱要』などの重要な文書が翻訳されました。これらの翻訳作業を進めるにあたって、教会用語や典礼用語も再検討されてきたので、改訂版においても用語の見直しを行いました。

- 3 式文は口語体にすることを原則とするが、一部、文語的表現も許容する。

現代の日本語は口語体を主流としながらも、文語体を完全に排除するものではありません。このことに鑑み、式文は原則として口語体で翻訳されていますが、現行版が用いている「聖なる」「神なる」などの表現は残されています。

- 4 現行『ミサ典礼書』に採用された日本のための適応（adaptation）を再検討し、必要な場合は修正を加える。

第二バチカン公会議によって、各地方教会の文化や習慣をふまえて、典礼秘跡省の認証を得たうえで適応を実施することが可能になりました。現行『ミサ典礼書』にもこうした適応が複数導入されています。今回の改訂にあたっては、すでに採用されている適応に対して寄せられた意見を参考に、適応を再検討しました。

- 5 教会管区ごとの典礼研究会や全国典礼担当者会議などを通じて寄せられた意見を可能な範囲で反映させる。

前述した現行『ミサ典礼書』に対する意見を集めるため、教会管区ごとの典礼研究会を開催するとともに、各教区の典礼担当者の集いを一年に一度開催してきました。これらの機会に寄せられた意見を参考に改訂作業を行いました。

3. 式文の唱え方の区別

ミサの式文は、一律に同じように唱えるものではありません。式文の性質や祭儀の形態、荘厳さの程度などに応じた発声で唱えるようにします。早すぎたり遅すぎたりせず、聞き取りやすい速さで唱えることも大切です。また、とくに司式者と会衆が対話形式で唱える部分は、できるかぎり相手に顔を向けて唱えるようにします。

現行『ミサ典礼書』では、式文の唱え方の区別が不明確な部分があったので、改訂版ではラテン語規範版に従って、以下のように区別して唱えるよう典礼注記に記載されています。

①唱える (*dicere*)

もっとも一般的な発声で、会衆に聞こえるように唱える場合の唱え方です。たとえば、十字架のしるしとあいさつ、回心の祈り、栄光の賛歌、公式祈願、信仰宣言、主の祈り、平和の賛歌、派遣の祝福などです。これらは歌うこともできます。文脈によって、司式者の場合は「言う」、「祈る」と表記されることもあります。

②はっきりと唱える (*clara voce dicere; acclamare*)

ことばや祈りを強調する場合の唱え方です。たとえば、公式祈願の「アーメン」、聖書朗読の後、感謝の賛歌、秘跡制定句、奉献文の結びの「アーメン」、教会に平和を願う祈りなどです。これらは歌うこともできます。

③歌う (cantare)

とくに司祭が唱え会衆がそれに答える部分、あるいは司祭と会衆が同時に唱えるべき部分が優先的に歌われます。たとえば、開祭のあいさつ、ミサの賛歌、答唱詩編、アレルヤ唱(詠唱)などです。

④小声で唱える (submissa voce dicere)

近くの助祭や奉仕者に聞こえるようにする唱え方です。たとえば、福音朗読前の助祭への祝福、パンとぶどう酒を供える祈り(奉納の歌の間)、共同司式者が奉献文を唱えるときなどです。奉献文の中で、共同司式者が全員で唱える部分、とくに声に出して唱える聖別のことばでは、主司式司祭の声がはっきりと聞こえるよう、小声で唱えるようにします(「ローマ・ミサ典礼書の総則」218)。

⑤静かに唱える (secreto dicere)

心を込めて奉仕の務めを果たせるよう自分のために祈る場合の唱え方です。たとえば、福音朗読後、パンとぶどう酒を供える祈りの後、清め、ホステアの薄片をカリスに入れるとき、拝領前などです。

なお、現在の典礼では、「聖なる沈黙も、祭儀の一部として、守るべきときに守る」(「ローマ・ミサ典礼書の総則」45)ことが勧められています。「ミサの式次第」の典礼注記で指示されている沈黙のほかに、日本のための適応として導入された沈黙が加えられています。「沈黙の性格はそれぞれの祭儀のどこで行われるかによる」(同45)ので、司牧者は、その意味を大切に適切な沈黙の時間をとるようにします。

4. 公式祈願の結びの定句

「ローマ・ミサ典礼書の総則」の改訂に伴い、3つの公式祈願、すなわち集会祈願(「総則」54)、奉納祈願(「総則」77)、拝領祈願(「総則」89)の結びの定句の翻訳が再検討され、日本カトリック司教協議会2021年度第1回臨時司教総会(7月開催)で認可されました。

2022年11月27日からの「ミサの式次第」改訂版の実施とともに、以下の新しい結びの定句を暫定的に使用していきます。

集会祈願

①祈りが御父に向かう場合

聖霊による一致のうちに、
あなたとともに神であり、世々としえに生き、治められる御子、
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

②祈りが御父に向かうが、結びが御子に言及されている場合

主キリストは、聖霊による一致のうちに、
あなたとともに神であり、生きて、治めておられます、世々としえに。
アーメン。

③祈りが御子に向かう場合

あなたは、聖霊による一致のうちに、
御父とともに神であり、生きて、治めておられます、世々としえに。
アーメン。

奉納祈願

①祈りが御父に向かう場合

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

②祈りが御父に向かうが、結びが御子に言及されている場合

主キリストは生きて、治めておられます、世々としえに。アーメン。

拝領祈願

①祈りが御父に向かう場合

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

②祈りが御父に向かうが、結びが御子に言及されている場合

主キリストは生きて、治めておられます、世々としえに。アーメン。

③祈りが御子に向かう場合

あなたは生きて、治めておられます、世々としえに。アーメン。

ミサの式次第と第一～第四奉献文

～改訂された式文および典礼注記とおもな改訂箇所解説～

以下は教皇庁典礼秘跡省から正式に認証を受けた「ミサの式次第と第一～第四奉献文」の改訂版です。式文と典礼注記の太字部分は、ラテン語規範版第3版に基づいて変更された箇所を示しています。おもな改訂箇所や日本のための適応についての解説は、下段に記されています。この解説の冒頭にある数字は、ミサの式次第の通し番号を示しています。

開祭

1 入祭の歌と行列

会衆が集まると入祭の歌を歌う。その間に、司祭は奉仕者とともに祭壇へ行く。

祭壇の表敬と会衆へのあいさつ

祭壇に着くと、司祭は奉仕者とともに手を合わせて深く礼をする。続いて、司祭は祭壇に近づき、両手で祭壇に触れながら深く礼をして祭壇に表敬する。必要に応じて十字架と祭壇に献香する。その後、司祭は奉仕者とともに席に行く。入祭の歌が終わると、司祭は会衆に向かって次のことばを唱え、司祭と信者は立ったまま自分に十字架のしるしをする。

父と子と聖霊のみ名によって。

会衆は答える。

アーメン。

1すでに2015年11月29日から実施されているように、日本のための適応として、司祭は祭壇に接吻して表敬する代わりに、両手で祭壇に触れて深く礼をします。助祭がいる場合は助祭も同様にします。内陣に聖櫃がある場合は、祭壇に表敬する前に、司祭・助祭・他の奉仕者は聖櫃に対して立ったまま手を合わせて深く礼をします（『新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所—2015年11月29日（待降節第1主日）からの実施に向けて』14頁参照）。献香する場合、十字架にも献香することが加えられました。

2 続いて、司祭は手を広げて会衆にあいさつする。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

または

父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

または

主は皆さんとともに。

司教は、この最初のあいさつのとき、「主は皆さんとともに」の代わりに次のように言う。

平和が皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

3 司祭、あるいは助祭または他の奉仕者は、簡潔なことばでその日のミサについて信者に説明することができる。

2 現行版の「また司祭とともに」の「司祭」は、「祭儀を司る者」の意味で採用された訳でした。しかしながら、司教や助祭に対して唱えるときには違和感があるという意見があり、再検討されました。ラテン語規範版の直訳では「またあなたの霊とともに」となりますが、「あなたの霊」では身体を離れた靈魂を連想させるなど意味がつかみにくいため、諸外国や他教派の式文も参考にして、これを聖書的語法に基づく全人的な表現と受け止め、「あなた」とする訳が採用されました。同様の変更は、福音朗読の前（15）、叙唱の前（31、33、99、107、116）、平和のあいさつ（127）、派遣の祝福（141、143）にもあります。

4 回心の祈り

司祭は典礼曆に合わせて、たとえば次のようなことばで信者を回心へと招き、一同は回心の祈りを唱える。

主日、とくに復活節の主日には、通常の回心の祈りに代えて、洗礼の恵みを思い起こすために「水の祝福と灌水」(91頁以下参照)を行うことができる。

皆さん、聖なる祭儀を行う前に、わたしたちの罪を認め、ゆるしを願いましょう。

または

皆さん、わたしたちの罪を思い、感謝の祭儀を祝う前に心を改めましょう。

または

皆さん、救いの神秘をふさわしく祝うことができるよう、わたしたちの生活を振り返り、心を改めましょう。

または (待降節に)

皆さん、救い主を遣わしてくださる神のいつくしみを思い、心を改めましょう。

または (降誕節に)

皆さん、父である神は、御子を救い主としてお与えになりました。この神秘を喜びのうちに祝うことができるよう、心を改めましょう。

または (四旬節に)

皆さん、父である神は、回心して立ち返る人を喜んで迎えてくださいます。神の深い愛を思い、罪のゆるしを願いましょう。

または (復活節に)

4 典礼曆に応じて用いることのできる回心への招きの例文が、日本に固有の式文として掲載されています(青字の部分)。また、主日、とくに復活節の主日には、通常の回心の祈りに代えて行うことができる「水の祝福と灌水」の日本語訳も典礼秘跡省の認証を受けたので用いることができます(91頁以下参照)。

皆さん、主イエスの復活の栄光を思い、わたしたちも日々新しい人になることができるよう願いましょう。

または（年間に）

皆さん、ふさわしい心で神に賛美と感謝をささげることができるよう、わたしたちの過ちを認め、ゆるしを願いましょう。

回心の祈り 一

短い沈黙の後、一同は手を合わせ、頭を下げて、一般告白の式文と一緒に唱える。

全能の神と、

兄弟姉妹の皆さんに告白します。

わたしは、思い、ことば、行い、怠りによってたびたび罪を犯しました。

聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟姉妹の皆さん、

罪深いわたしのために神に祈ってください。

続いて、司祭は罪のゆるしを祈る。

全能の神、いつくしみ深い父がわたしたちの罪をゆるし、

永遠のいのちに導いてくださいますように。

会衆は答える。

4 「回心の祈り一」の罪の告白のことばは、現行版の「兄弟の皆さん」が「兄弟姉妹の皆さん」に変更されました。

規範版では「わたしは、思い、ことば、行い、怠りによって」の部分で胸を打つ動作をして、「わたしの過ちによって、わたしの過ちによって、わたしの大きいなる過ちによって」と唱えます。日本ではこのような動作によって自らの罪を思い起こす習慣はないので、司祭と会衆は「アーメン」まで手を合わせ、頭を下げて、罪を悔いる心を表します。この姿勢は日本のための適応です。また、規範版の直訳は日本語式文としてなじまないので、「たびたび罪を犯しました」、「罪深いわたし」という表現にその意味を込めて訳されています。

現行版の典礼注記では「司祭は罪のゆるしを宣言する」と訳されていますが、ミサの回心の祈りはゆるしの秘跡の効果をもつものではないので（「ローマ・ミサ典礼書の総則」51参照）、規範版に基づいて「司祭は……を祈る」に変更されました。

アーメン。

回心の祈り 二

5 司祭は信者を回心へと招く。典礼暦に合わせた招きは17頁以下参照。

皆さん、聖なる祭儀を行う前に、わたしたちの罪を認め、ゆるしを願ひましょう。

短い沈黙の後、司祭は次のように唱える。

主よ、あわれみをわたしたちに。

会衆は答える。

わたしたちはあなたに罪を犯しました。

司祭は唱える。

主よ、いつくしみを示し、

会衆は答える。

わたしたちに救いをお与えください。

続いて、司祭は罪のゆるしを祈る。

全能の神、いつくしみ深い父がわたしたちの罪をゆるし、

永遠のいのちに導いてくださいますように。

会衆は答える。

アーメン。

5 現行版では「回心の祈り二」は全員で唱えるように短くまとめて訳されていますが、規範版に従って司式者と会衆が対話形式で唱えるように変更されました。司祭による招きのことばの例文は4を参照してください。

回心の祈り 三

6 司祭は信者を回心へと招く。典礼暦に合わせた招きは 17 頁参照。

皆さん、聖なる祭儀を行う前に、わたしたちの罪を認め、ゆるしを願いましょう。

短い沈黙の後、司祭、あるいは助祭または他の奉仕者は、聖書の朗読箇所や典礼暦に合わせて、次のようなことばを先唱し、会衆は「主よ、いつくしみをわたしたちに」、「キリスト、いつくしみをわたしたちに」を唱える。

先唱 打ち砕かれた心をいやすために遣わされた主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 罪びとを招くために来られたキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 父の右の座にあって、わたしたちのためにとりなして下さる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

待降節 一（第 1 主日から 12 月 16 日まで）

先唱 闇にさまよう民を救うために来られる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 光として世に来られるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 すべてを新たにするために再び来られる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

待降節 二（12 月 17 日から 12 月 24 日まで）

先唱 洗礼者ヨハネを通して回心を呼びかけて下さる主よ、いつくしみを。

6 「回心の祈り三」は現行版と同じように連願形式で唱えます。先唱は、司祭、あるいは助祭または他の奉仕者が唱えます。招きのことばの例文は 4 を、式文の変更については 7 の解説を参照してください。

回心の祈りの一部として「いつくしみの賛歌」を歌う場合、それぞれの応唱の前に短いことばを入れることができるので（「ローマ・ミサ典礼書の総則」52 参照）、日本のための適応として、聖書朗読や典礼暦に応じて唱えることのできる例文を加えました（青字の部分）。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 聖霊によっておとめマリアに宿られたキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 救いの喜びをもたらしてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

降誕節 一

先唱 おとめマリアからお生まれになった主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 人類を救うために人となられたキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 わたしたちのうちに住まわれた主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

降誕節 二

先唱 飼い葉桶に眠られる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 羊飼いにご自分を示されるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 真理を求める人を星によって導かれる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

四句節 一

先唱 荒れ野で祈り、誘惑に打ち勝たれた主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 わたしたちのために苦しみを受けられたキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 罪びとのためにいのちをささげてくださった主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

四句節 二 (洗礼志願者とともに)

先唱 飢え渴く人にいのちの水を与えてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 信じる人の心の目を開いてくださるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 ご自分に従う人を、永遠のいのちに導いてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

復活節 一

先唱 エマオへの道とともに歩まれた主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 聖書をひもとき、弟子たちを力づけてくださったキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 パンを裂き、与えてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

復活節 二

先唱 羊の名を呼び、緑の牧場に導いてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 ご自分の羊のためにいのちをささげてくださるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 迷った羊を群れに連れ戻してくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

年間 一

先唱 御父への道である主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 真理のことばであるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 永遠のいのちである主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

年間 二

先唱 重荷を負う人を招いておられる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 柔和で謙遜なキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 疲れた人を休ませてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

年間 三

先唱 すべての人を御父の家に立ち返らせてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 罪をゆるし、分裂の痛みをいやしてくださるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 互いにゆるし合う力を与えてくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

年間 四

先唱 御父の愛を示してくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱 わたしたちを友としてくださるキリスト、いつくしみを。

会衆 キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱 苦しむ者とともにおいでくださる主よ、いつくしみを。

会衆 主よ、いつくしみをわたしたちに。

続いて、司祭は罪のゆるしを祈る。

全能の神、いつくしみ深い父がわたしたちの罪をゆるし、

永遠のいのちに導いてくださいますように。

6 現行版の典礼注記では「司祭は罪のゆるしを宣言する」と訳されていますが、ミサの回心の祈りはゆるしの秘跡の効果をもつものではないので（「ローマ・ミサ典礼書の総則」51 参照）、規範版に基づいて「司祭は……を祈る」に変更されました。

会衆は答える。

アーメン。

7 いつくしみの賛歌（キリエ）

いつくしみの賛歌（キリエ）が続く。6の「回心の祈り 三」を用いた場合は省く。

（一）

先唱	主よ、いつくしみを。	会衆	主よ、いつくしみをわたしたちに。
先唱	キリスト、いつくしみを。	会衆	キリスト、いつくしみをわたしたちに。
先唱	主よ、いつくしみを。	会衆	主よ、いつくしみをわたしたちに。

（二）

先唱	キリエ、エレイソン。	会衆	キリエ、エレイソン。
先唱	クリステ、エレイソン。	会衆	クリステ、エレイソン。
先唱	キリエ、エレイソン。	会衆	キリエ、エレイソン。

7 現行版では文語で唱えているミサの賛歌は、改訂版では原則として口語で唱えることになりました。

この賛歌がもつ、いつくしみに満ちた主をほめたたえるという特徴をふまえ、現行版の「あわれみ」を「いつくしみ」に変更しました。また、口語訳の「いつくしんでください」は、賛歌として歌う場合、冗長な印象を与えるので、「いつくしみを」で結ぶこととし、会衆のことに「わたしたちに」が加えられて主に対する嘆願が表されています。

賛歌の表題は「いつくしみ」を用いた式文に合わせて変更されました。表題には、一般に知られているラテン語の表題を加えました。

なお、1967年に公布された教皇庁礼部聖省『典礼音楽に関する指針（*Musicam Sacram*）』55に基づき、歌う場合は従来の文語によるミサの賛歌の旋律（『典礼聖歌』に掲載）を引き続き使用することができます。

また、（二）として原文のまま唱えることができる式文を加えました。ラテン語規範版にもギリシア語のまま記されており、近年の諸外国版でも原文で唱える可能性を残していることが考慮されました。

8 栄光の賛歌（グロリア）

規定に従って、一同は栄光の賛歌（グロリア）を歌うかまたは唱える。

天には神に栄光、
地にはみ心になう人に平和。
神なる主、天の王、全能の父なる神よ。
わたしたちは主をほめ、主をたたえ、
主を拝み、主をあがめ、
主の大いなる栄光のゆえに感謝をささげます。
主なる御ひとり子イエス・キリストよ、
神なる主、神の小羊、父のみ子よ、
世の罪を取り除く主よ、いつくしみをわたしたちに。
世の罪を取り除く主よ、わたしたちの願いを聞き入れてください。
父の右に座しておられる主よ、いつくしみをわたしたちに。
ただひとり聖なるかた、すべてを越える唯一の主、
イエス・キリストよ、
聖霊とともに父なる神の栄光のうちに。
アーメン。

9 集会祈願

栄光の賛歌（グロリア）が終わると、司祭は手を合わせたまま言う。

祈りましょう。

一同は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る。

続いて、司祭は手を広げて集会祈願を唱え、会衆は結びにはっきりと唱える。

アーメン。

8 他のミサの賛歌と同じように、原則として口語に変更され、賛歌の表題にラテン語の表題を加えました。歌い出しは、司祭あるいは適当であれば先唱者か聖歌隊が務めます（「ローマ・ミサ典礼書の総則」53 参照）。聖書朗読などでは「御子」を「おんこ」と読むように統一されていますが、栄光の賛歌では「みこ」の読みを残すこととし、「……父のみ子よ」としています。

ことばの典礼

10 第一朗読

朗読者は朗読台に行き、第一朗読を行う。その間、一同は着席して聞く。

朗読の終わりを示すため、朗読者は手を合わせてはっきりと唱える。

神のみことば。

一同は答える。

神に感謝。

続いて、朗読者は聖書に一礼して席に戻る。

一同は沈黙のうちに、神のことばを味わう。

11 答唱詩編

詩編唱者あるいは先唱者は詩編を歌うかまたは唱え、会衆は答唱する。

12 第二朗読

その後、第二朗読が行われる場合、朗読者は第一朗読と同じように朗読台から朗読する。

朗読の終わりを示すため、朗読者は手を合わせてはっきりと唱える。

神のみことば。

一同は答える。

神に感謝。

10 (12) 第一 (第二) 朗読後の所作やことばについては、現行版に採用された日本のための適応の趣旨が正しく伝わらなかったために、一部に混乱や不一致がみられました。そのため、今回の改訂ではこの適応について再検討し、規範版に従って朗読者が「神のみことば」と唱え、一同が「神に感謝」と唱えることになりました。これらのことばによって、「信仰と感謝の心をもって受け取った神のことばに誉れを帰する」(「ローマ・ミサ典礼書の総則」59) ことができます。なお、朗読後に朗読者が聖書に一礼して席に戻ることに、その後、一同が沈黙のうちに神のことばを味わうことは、日本のための適応です。

続いて、朗読者は聖書に一礼して席に戻る。

一同は沈黙のうちに、神のことばを味わう。

13 アレルヤ唱（詠唱）

続いて一同は起立し、典礼季節に応じて、アレルヤ唱、あるいは典礼注記によって定められた他の歌（詠唱）を歌う。

14 福音朗読の準備

献香をする場合、司祭は歌の間に香炉に香を入れる。

その後、福音を告げる助祭は司祭の前で深く頭を下げ、小声で祝福を願う。

祝福をお願いいたします。

司祭は小声で唱える。

福音をふさわしく告げるため、主があなたの心と口を祝福してくださいますように。

✠ 父と子と聖霊のみ名によって。

助祭は自分に十字架のしるしをしながら答える。

アーメン。

助祭がない場合、司祭は祭壇の前で頭を下げ、静かに唱える。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

15 福音の崇敬と朗読

その後、助祭あるいは司祭は朗読台に行く。必要に応じて、香炉と火をともしたろうそくを持つ奉仕者が先導する。

助祭あるいは司祭は言う。

14 福音を告げる助祭は司祭の前で深く頭を下げて祝福を願い、司祭は祝福のことばを小声で唱えます。助祭がない場合、司祭は祭壇の前で頭を下げ、定められたことばを静かに唱えます。

主は皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

助祭あるいは司祭は言う。

○○○による福音。

そのとき、助祭あるいは司祭は、朗読福音書、額、口、胸に十字架のしるしをする。

会衆ははっきりと唱える。

主に栄光。

助祭あるいは司祭は必要に応じて朗読福音書に献香し、福音を告げ知らせる。

16 賛美の応唱

福音朗読が終わると、助祭あるいは司祭は朗読福音書を両手で掲げてはっきりと唱える。

主のみことば。

一同は答える。

キリストに賛美。

助祭あるいは司祭は静かに唱える。

15 福音を朗読する助祭あるいは司祭が、額、口、胸に十字架のしるしをするとき、他のすべての者も同じようにします（「ローマ・ミサ典礼書の総則」134参照）。

16 現行版では、福音朗読の後、助祭あるいは司祭と会衆は同じことば（「キリストに賛美」）を唱えますが、改訂版では規範版に合わせて、助祭あるいは司祭のことばが変更されました。規範版では第一（第二）朗読の後のことばと同じ“Verbum Domini.”ですが、福音朗読が主キリストのことばであることを明確にするため「主のみことば」と訳し、第一（第二）朗読後（「神のみことば」）と区別しました。

規範版では福音朗読の後、助祭あるいは司祭は福音書に接吻をして表敬しますが、日本のための適応として、福音書を両手で掲げて「主のみことば」と唱えます。

福音のことばによって、わたしたちが**罪から清められます**ように。

17 説教

続いて、すべての主日と守るべき祝日には、**司祭あるいは助祭によって説教が行われなければならない**。他の日にも勧められる。

18 信仰宣言

説教の後、すべての主日と祭日、およびより盛大に祝われる特別な祭儀に、一同は**ニケア・コンスタンチノーブル信条**、あるいは使徒信条と呼ばれるローマ教会の洗礼信条を、**歌うかまたは唱えて信仰宣言を行う**。

ニケア・コンスタンチノーブル信条

わたしは信じます。唯一の神、
全能の父、
天と地、見えるもの、見えないもの、
すべてのものの造り主を。
わたしは信じます。唯一の主イエス・キリストを。
主は神のひとり子、
すべてに先立って父より生まれ、
神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、
造られることなく生まれ、父と一体。
すべては主によって造られました。
主は、わたしたち人類のため、

17 すべての主日と守るべき祝日に、司祭あるいは助祭は必ず説教を行います（「ローマ・ミサ典礼書の総則」66 参照）。

18 現行版の典礼注記では「主日と祭日に信仰宣言を行う」という指示でしたが、より盛大に祝われる特別な祭儀においても歌うか唱えることが加えられました（「ローマ・ミサ典礼書の総則」68 参照）。

規範版では、洗礼を思い起こすために、とくに四旬節と復活節に使徒信条を唱えることを勧めていますが、日本のための適応としてどの季節でも使徒信条を唱えることができます。歌う場合は、司祭あるいは適当であれば先唱者が聖歌隊が歌い始めます（同 68 参照）。

わたしたちの救いのために天からくだり、

以下、「人となられました」まで一同は礼をする。

聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、
人となられました。

ポンティオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、
苦しみを受け、葬られ、

聖書にあるとおり三日目に復活し、

天に昇り、父の右の座に着いておられます。

主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。

その国は終わることがありません。

わたしは信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を。

聖霊は、父と子から出て、

父と子とともに礼拝され、栄光を受け、

また預言者をとおして語られました。

わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。

罪のゆるしをもたらし唯一の洗礼を認め、

死者の復活と

来世のいのちを待ち望みます。アーメン。

19 使徒信条

天地の創造主、

全能の父である神を信じます。

父のひとり子、わたしたちの主

イエス・キリストを信じます。

18 規範版に従って、キリストの受肉の神秘について述べる部分で一同は礼をすることが明記されるようになりました。受肉の神秘において、神の恵みに深い感謝を向ける、ローマ典礼に伝統的な礼拝行為です。

以下、「おとめマリアから生まれ」まで一同は礼をする。

主は聖霊によってやどり、
おとめマリアから生まれ、
ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、
十字架につけられて死に、葬られ、
陰府に下り、
三日目に死者のうちから復活し、
天に昇って、
全能の父である神の右の座に着き、
生者と死者を裁くために来られます。
聖霊を信じ、
聖なる普遍の教会、
聖徒の交わり、
罪のゆるし、
からだの復活、
永遠のいのちを信じます。アーメン。

20 共同祈願（信者の祈り）

続いて、共同祈願すなわち信者の祈りを行う。

19 「ニケア・コンスタンチノーブル信条」と同じように「使徒信条」においても、規範版に従って、キリストの受肉の神秘について述べる部分で一同は礼をすることが明記されるようになりました。受肉の神秘において、神の恵みに深い感謝を向ける、ローマ典礼に伝統的な礼拝行為です。

感謝の典礼

21 祭壇の準備

ことばの典礼が終わると、奉納の歌が始まる。その間、奉仕者は、コルポラーレ、プリフィカトリウム、カリスとパラ、ミサ典礼書を祭壇に準備する。

22 奉納行列

信者は、感謝の祭儀のためのパンとぶどう酒、また、教会と貧しい人を助けるためのその他の供えものをささげることを通して、自らの参加する心を表すことが勧められる。

23 パンとぶどう酒を供える祈り

司祭は祭壇に行き、パンを載せたパテナを取り、両手で祭壇上に少し持ち上げ、次の祈りを小声で唱える。

神よ、あなたは万物の造り主。

ここに供えるパンはあなたからいただいたもの、

大地の恵み、労働の実り、

わたしたちのいのちの糧となるものです。

司祭はパンを載せたパテナをコルポラーレの上に置く。

奉納の歌を歌わない場合、司祭はこの祈りをはっきりと唱えることができる。その場合、結びに会衆ははっきりと唱えることができる。

神よ、あなたは万物の造り主。

24 助祭または司祭は、ぶどう酒と少量の水をカリスに注いで静かに唱える。

この水とぶどう酒の神秘によってわたしたちが、

人となられたかたの神性にあずかることができますように。

23 司祭は、パテナを手取る時は両手で取り、祭壇の上に少し持ち上げます。パテナとカリスを同時に手取ることはできません。

25 司祭はカリスを取り、両手で祭壇上に少し持ち上げ、次の祈りを小声で唱える。

神よ、あなたは万物の造り主。

ここに供えるぶどう酒はあなたからいただいたもの、
大地の恵み、労働の実り、
わたしたちの救いの杯となるものです。

司祭はカリスをコルポラーレの上に置く。

奉納の歌を歌わない場合、司祭はこの祈りをはっきりと唱えることができる。その場合、
結びに会衆ははっきりと唱えることができる。

神よ、あなたは万物の造り主。

26 その後、司祭は深く頭を下げ、静かに唱える。

神よ、心から悔い改めるわたしたちが受け入れられ、
きょう、み前に供えるいけにえも、み心にかなうものとなりますように。

27 献香

必要に応じて、供えものと十字架と祭壇に献香する。

その後、助祭または他の奉仕者が司祭と会衆に献香する。

28 清め

続いて、司祭は祭壇の脇で手を洗い、静かに唱える。

神よ、わたしの汚れを洗い、罪から清めてください。

25 司祭は、カリスを手に取りるときは両手で取り、祭壇の上に少し持ち上げます。パテナとカリスを同時に手には取ることができません。

現行版では23と25の祈りのことは同じですが、規範版に従い、カリスを手にとって唱える祈りの結びは「救いの杯」に変更されました。

27 献香をする場合、規範版に基づき、十字架にも献香します。

29 司祭は祭壇の中央に立ち、会衆に向かって手を広げ、次の招きのことばを述べてから手を合わせる。

皆さん、ともにささげるこのいけにえを、
全能の父である神が受け入れてくださるよう祈りましょう。

会衆は立って答える。

神の栄光と賛美のため、
またわたしたちと全教会のために、
あなたの手を通しておささげるいけにえを、
神が受け入れてくださいますように。

一同はその後、しばらく沈黙のうちに祈る。

30 奉納祈願

続いて、司祭は手を広げて奉納祈願を唱え、会衆は結びにはっきりと唱える。

アーメン。

29 祭壇の準備が整うと、司祭は会衆に向かって祈りへの招きのことばを述べます。現行版では、招きのことばの後の沈黙を勧めています。会衆が応唱するようにも受け取れる表現が典礼注記にあるため、不統一が生じていました。改訂版では規範版に従い、会衆は嘆願形式の祈り「神の栄光と賛美のため……」を唱えることになりました。この祈りの後、しばらく沈黙のうちに祈ることは、日本のための適応です。

奉献文（エウカリスティアの祈り）

31 続いて、司祭は奉献文を始める。

司祭は手を広げて言う。

主は皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

司祭は手を挙げて続ける。

心をこめて、

会衆は答える。

神を仰ぎ、

奉献文 奉献文は「祭儀全体の中心であり頂点」（「ローマ・ミサ典礼書の総則」78）となる祈りで、ラテン語では“Prex eucharistica”です。“eucharistia”ということばがもつ豊かな内容を表すため、表題に「エウカリスティアの祈り」を加えました。

31 奉献文は、叙唱前の司祭と会衆との対話句から始まります。この対話句は、古代キリスト教の時代から用いられてきました。規範版は伝統に従い3組の対話句から成りますが、現行版では2組の対話句にまとめられていました。改訂版では、教会の伝統をふまえ3組の対話句を用いることになりました。

第一の対話句は、現行版と同じ形式で、会衆のことばが「あなたとともに」に変更されました（16頁参照）。

第二の対話句は、現行版では司祭が唱えることばとして一つにまとめられていますが、規範版どおり対話形式に変更されました。ただし、司祭のことばの直訳「心を上に」では意味を理解しにくいので、現行の日本語訳を生かして「心をこめて」を採用しました。神はすべての被造物を超越しつつ、人間の心に内在される（ヨハネ14・23参照）ことを念頭に置いています。これに答える会衆のことばも、直訳「主に向けています」ではなく、現行版の「神を仰ぎ」を用いています。「心をこめる」という内的な動きと、「仰ぐ」という外的な動きによって、神の内在性と超越性が表現されています。この第二の対話句のとき、規範版に基づき、司祭は広げている両手を挙げて唱えます。

司祭は手をあげたまま続ける。

賛美と感謝をささげましょう。

会衆は答える。

それはとうとい大切な務め（です）。

叙唱

司祭は手をあげたまま叙唱を唱える。叙唱の本文中の（です）は、歌う場合には省く。

感謝の賛歌（サンクトゥス）

叙唱の終わりに司祭は手を合わせる。そして、会衆とともに感謝の賛歌（サンクトゥス）を歌うか、はっきりと唱えて叙唱を結ぶ。

聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主。

主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。

主の名によって来られるかたに賛美。

天には神にホザンナ。

32 すべてのミサにおいて、司式司祭が、奉献文の旋律のつけられた部分、とくに主司式の部分を歌うことができる。

第一奉献文（ローマ典文）の（ ）の部分は省くことができる。

31 第三の対話句も規範版に従って変更され、現行の会衆のことは司祭のことはとして用いました。「感謝」を表す「エウカリスティア」の豊かな意味を表すために、「賛美と感謝」という従来の表現を生かしています。会衆のことはこの司祭のことはへの賛同を表しています。この部分の「（です）」は、歌う場合には省くことを表します。

「感謝の賛歌」も他のミサの賛歌と同じように口語に変更され、ラテン語の表題が加えられました。現行版の「万軍の」は戦いを連想させる表現なので変更が求められていました。「天には神に」は、「天のもっとも高いところに神がおられる」というヘブライ的な表現を集約したもので、受難の主日に行われる枝の行列のときの交唱に合わせました。

第一奉献文（ローマ典文）

83

司祭 主は皆さんとともに。

会衆 またあなたとともに。

司祭 心をこめて、

会衆 神を仰ぎ、

司祭 賛美と感謝をささげましょう。

会衆 それはとうとい大切な務め（です）。

典礼注記に従って叙唱が続き、その結びに感謝の賛歌（サンクトゥス）を歌う。

聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主。

主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。

主の名によって来られるかたに賛美。

天には神にホザンナ。

84 司祭は手を広げて唱える。

いつくしみ深い父よ、

御子わたしたちの主イエス・キリストによって、

いまつつしんでお願いいたします。

手を合わせる。

そして、パンとカリスの上に十字架のしるしをしながら唱える。

この汚れのない聖なるささげものを受け入れ、✠ 祝福してください。

手を広げて続ける。

わたしたちは、まず聖なる普遍の教会のために、

これをあなたにささげます。

全世界に広がる教会に平和を与え、これを守り、

一つに集め、治めてください。

教皇○○○○、

わたしたちの司教○○○○、（協働司教および補佐司教の名を加えることができる）

また、使徒からの普遍の信仰を正しく伝える

すべての人のためにこの供えものをささげます。

85 生者のための祈り

聖なる父よ、あなたに信頼する人々（○○○○）を心に留めてください。

手を合わせ、祈りをささげようとする人のためにしばらく祈る。

その後、手を広げて続ける。

また、ここに集うすべての人を心に留めてください。

その信仰と敬虔な心をあなたはご存じです。

わたしたちとすべての親しい人々のためにこの賛美のいけにえをささげ、

あがないと救いと平穏を願って、

永遠のまことの神、あなたに祈ります。

86

全教会の交わりの中で、

わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、

栄光に満ちた終生おとめマリアを思い起こし、

聖ヨセフ、

使徒と殉教者、

ペトロとパウロ、アンデレ、

（ヤコブ、ヨハネ、トマス、ヤコブ、フィリポ、

バルトロマイ、マタイ、シモンとタダイ、

リノ、クレト、クレメンズ、シスト、

コルネリオ、チプリアノ、ラウレンチオ、クリソゴノ、

84 同じ教皇名がある場合、奉献文の中でも○世を加えて区別するのは日本の習慣です。現教皇は初めて「フランシスコ」を教皇名としているので、唱える際に○世はつけません。

ヨハネとパウロ、コスマとダミアノ)

そして、すべての聖人を思い起こします。

彼らのいさおしと取り次ぎによって、

わたしたちをいつも守り強めてください。

手を合わせる。

(わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。)

「全教会の交わりの中で、……」に加える固有式文

主の降誕とその八日間中

全教会の交わりの中で、わたしたちは、

汚れのないおとめマリアによって

世に救い主が与えられたこの聖なる夜（日）を祝います。

わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

主の降誕の夜半のミサには「この聖なる夜」、その後は、主の降誕の8日目まで「聖なる日」と唱える。

主の公現

全教会の交わりの中で、わたしたちは、

栄光のうちにあなたとともに永遠の神であるひとり子が、

まことの人間として、

見えるからだをもって現れたこの聖なる日を祝います。

わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

主の晩さんの夕べのミサ

全教会の交わりの中で、わたしたちは、

主イエス・キリストが、

わたしたちのために渡されたこの聖なる日を祝います。

わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

復活徹夜祭から復活節第2主日まで

全教会の交わりの中で、わたしたちは、
主イエス・キリストが、
まことに復活されたこの聖なる夜（日）を祝います。
わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

復活徹夜祭のミサには「この聖なる夜」、その後、復活節第2主日までは「聖なる日」と唱える。

主の昇天

全教会の交わりの中で、わたしたちは、
御ひとり子が人となり、わたしたちの弱さを身に受けて、
あなたの栄光の右の座に高めてくださったこの聖なる日を祝います。
わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

聖霊降臨

全教会の交わりの中で、わたしたちは、
聖霊が使徒たちの上に
炎の舌のような形で現れたこの聖なる日を祝います。
わたしたちはまず、神である主イエス・キリストの母、……

87 手を広げて続ける。

聖なる父よ、
わたしたち奉仕者とあなたの家族のこの奉献を受け入れてください。
あなたの平和を日々わたしたちに与え、
永遠の滅びから救い、選ばれた者の集いに加えてください。

手を合わせる。

(わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。)

「わたしたち奉仕者とあなたの家族……」に加える固有式文

復活徹夜祭から復活節第2主日まで

聖なる父よ、

わたしたち奉仕者とあなたの家族のこの奉獻を受け入れてください。

水と聖霊によって新しく生まれ、

すべての罪のゆるしを受けた人々のためにもこれをささげます。

あなたの平和を日々わたしたちに与え、

永遠の滅びから救い、選ばれた者の集いに加えてください。

手を合わせる。

(わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。)

88 供えものの上に手を伸べたまま唱える。

神よ、この供えものを祝福し、受け入れ、

み心になうまことのいけにえとしてください。

わたしたちのために、最愛のひとり子、

主イエス・キリストの御からだと御血になりますように。

手を合わせる。

89 次の式文中の主のことは、その意味が伝わるように、とくにはっきりと唱える。歌う場合は、(である)を省く。

主イエスは受難の前夜、

パンを手に取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

聖なる手にパンを取り、

89 司祭はパンを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「聖なる手に……」を唱えます。

少し視線を上げる。

全能の父、神であるあなたを仰ぎ、
賛美と感謝をささげ、裂いて、
弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを取って食べなさい。
これはあなたがたのために渡される
わたしのからだ（である）。」

聖別されたホスティアを会衆に示した後、パテナの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

90 そして続ける。

食事の後に同じように、

カリスを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

聖なる手に、このとうとい杯を取り、
賛美と感謝をささげ、
弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを受けて飲みなさい。

89 規範版に基づき、司祭は「聖なる手にパンを取り」を唱えた後、少し視線を上げて「全能の父……」を唱えます。

パンを手にとって唱える現行版の式文の「割って」が、聖書の表現（一コリント 11・24、使徒言行録 2・42 など参照）に合わせて「裂いて」に変更されました。

ホスティアをパテナの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

90 司祭はカリスを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「聖なる手に……」を唱えます。

これはわたしの血の杯、
あなたがたと多くの人のために流されて
罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。
これをわたしの記念として行いなさい。」

カリスを会衆に示した後、コルポラーレの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

91 続いて、司祭は唱える。

信仰の神秘。

会衆は以下のいずれかのことばをはっきりと唱える。

主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。
再び来られるときまで。

または

主よ、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、
あなたの死を告げ知らせます。再び来られるときまで。

または

十字架と復活によってわたしたちを解放された世の救い主、
わたしたちをお救いください。

92 司祭は手を広げて唱える。

90 「これをわたしの記念として行いなさい。」は、制定の叙述全体を締めくくることばであることを意識して唱えます。

カリスをコルポラーレの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

91 会衆の応唱は、規範版に従って3種類の中から選ぶことになりました。いずれも、復活した主キリストに向けられたことばであることが分かるように訳されました。

聖なる父よ、

わたしたち奉仕者と聖なる民も、
いま、御子わたしたちの主キリストのとうとい受難、
死者のうちからの復活、
栄光に満ちた昇天を記念し、
あなたが与えてくださったたまものの中から、
清く、聖なる、汚れのないいけにえ、
永遠のいのちのパンと救いの杯を、
栄光の神、あなたにささげます。

93

このささげものをいつくしみ深く顧み、快く受け入れてください。
義人アベルの供えもの、
太祖アブラハムのいけにえ、
また、大祭司メルキセデクが供えた聖なるささげもの、
汚れのないいけにえを受け入れてくださったように。

94 手を合わせ、少し身をかがめて続ける。

全能の神よ、つつしんでお願いいたします。
このささげものをみ使いによって、
あなたの栄光に輝く祭壇に運ばせてください。
いま、この祭壇で、
御子の聖なるからだと血にあずかるわたしたちが、

身を起こして自分自身に十字架のしるしをしながら唱える。

天の祝福と恵みで満たされますように。

手を合わせる。

(わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。)

95 死者のための祈り

手を広げて唱える。

聖なる父よ、
信仰をもってわたしたちに先だち、
安らかに眠る人々（○○○○）を心に留めてください。

ここで手を合わせ、祈りをささげようとする死者のためにしばらく祈る。
その後、手を広げて続ける。

神よ、この人々とキリストのうちに眠りについたすべての人に、
慰めと光と安らぎをお与えください。

手を合わせる。

（わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。）

96 手を合わせたまま頭を少し下げて唱える。

あなたの豊かなあわれみに信頼する罪深いわたしたちを、

手を広げて続ける。（ ）の部分は省くことができる。

使徒と殉教者の集いに受け入れてください。
洗礼者ヨハネ、ステファノ、マチア、バルナバ、
（イグナチオ、アレキサンドロ、マルチェリノとペトロ、
フェリチタス、ベルベトゥア、アガタ、ルチア、
アグネス、セシリア、アナスタシア）
そして、すべての聖人にならう恵みを、
わたしたちの行いによるのではなく、
あなたのあわれみによってお与えください。

96 規範版では司祭は右手で胸を打って「あなたの豊かなあわれみに……」を唱えますが、日本のための適応として、手を合わせて頭を少し下げて唱えます。

97 手を合わせて続ける。

聖なる父よ、

キリストによって、あなたはつねにこのよいものを造り、
聖なるものとし、これにいのちを与え、祝福し、
わたしたちに与えてくださいます。

98 司祭はホスティアを載せたパテナとカリスを手に取り、高く掲げて唱える。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに、
聖霊の交わりの中で、
全能の神、父であるあなたに、
すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、

会衆ははっきりと唱える。

アーメン。

98 現行版では、司祭はパテナとカリスを「奉持して唱える」ですが、規範版に基づき、パテナとカリスを「手に取り、高く掲げて唱える」に変更されました。

『典礼聖歌』では、栄唱を歌唱する場合、会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるよう指示されています。そのため、歌唱しない場合も会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるのか、「アーメン」のみを唱えるのか、不統一が生じていました。改訂版では規範版に従い、栄唱を歌唱する場合も歌唱しない場合も、会衆は「アーメン」のみを唱えることになりました。

第二奉献文

99 固有の叙唱が定められているが、他の叙唱、とくに救いの秘義をふさわしく表す叙唱（たとえば、共通の叙唱）とともにこの奉献文を用いることもできる。

司祭 主は皆さんとともに。

会衆 またあなたとともに。

司祭 心をこめて、

会衆 神を仰ぎ、

司祭 賛美と感謝をささげましょう。

会衆 それはとうとい大切な務め（です）。

聖なる父よ、

最愛の子イエス・キリストを通して、

いつでもあなたに感謝をささげることは、

まことにとうとい大切な務め（です）。

あなたはみことばによってすべてをお造りになりました。

みことばである御子は、

救い主、あがない主としてわたしたちに遣わされ、

聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、

み旨を果たして、人々をあなたの聖なる民とするために、

手を広げて苦難に身をゆだね、

死を滅ぼして復活の栄光を現してくださいました。

わたしたちは声を合わせて歌います、

天使とすべての聖人とともに、

あなたの栄光をたたえて。

聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主。

主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。

主の名によって来られるかたに賛美。

天には神にホザンナ。

100 感謝の賛歌（サンクトゥス）の後、司祭は手を広げて唱える。

まことに聖なる神、すべての聖性の源である父よ、

101 手を合わせる。

そして、供えものの上に両手を伸べたまま唱える。

いま、聖霊を注ぎ、

この供えものを聖なるものとしてください。

手を合わせる。

そして、パンとカリスの上に十字架のしるしをしながら唱える。

わたしたちのために、

主イエス・キリストの御からだと ☩ 御血になりますように。

手を合わせる。

102 次の式文中の主のことは、その意味が伝わるように、とくにはっきりと唱える。歌う場合は、（である）を省く。

主イエスはすすんで受難に向かう前に、

パンを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

パンを取り、

感謝をささげ、裂いて、

弟子に与えて仰せになりました。

102 司祭はパンを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「パンを取り……」を唱えます。

パンを手にとって唱える現行版の式文の「割って」が、聖書の表現（一コリント 11・24、使徒言行録 2・42 など参照）に合わせて「裂いて」に変更されました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを取って食べなさい。
これはあなたがたのために渡される
わたしのからだ（である）。」

聖別されたホスティアを会衆に示した後、パテナの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

103 そして続ける。

食事の後に

カリスを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

同じように杯を取り、
感謝をささげ、弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを受けて飲みなさい。
これはわたしの血の杯、
あなたがたと多くの人のために流されて
罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。
これをわたしの記念として行いなさい。」

カリスを会衆に示した後、コルポラーレの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

102 ホスティアをパテナの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

103 司祭はカリスを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「同じように……」を唱えます。
「これをわたしの記念として行いなさい。」は、制定の叙述全体を締めくくることばであることを意識して唱えます。

カリスをコルポラーレの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

104 続いて、司祭は唱える。

信仰の神秘。

会衆は以下のいずれかのことばをはっきりと唱える。

主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。
再び来られるときまで。

または

主よ、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、
あなたの死を告げ知らせます。再び来られるときまで。

または

十字架と復活によってわたしたちを解放された世の救い主、
わたしたちをお救いください。

105 司祭は手を広げて唱える。

聖なる父よ、

わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、
み前であなたに奉仕できることを感謝し、
いのちのパンと救いの杯をささげます。

キリストの御からだと御血にともにあずかるわたしたちが、
聖霊によって一つに結ばれますように。

104 会衆の応唱は、規範版に従って3種類の中から選ぶことになりました。いずれも、復活した主キリストに向けられたことばであることが分かるように訳されました。

世界に広がるあなたの教会を思い起こし、

教皇○○○○、

わたしたちの司教○○○○、
(協働司教および補佐司教の名を加えることができる)

すべての奉仕者とともに、

あなたの民をまことの愛で満たしてください。

死者のためのミサの場合は、次の祈りを加えることができる。

(きょう) この世からあなたのもとに召された

○○○○ (名) を心に留めてください。

洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、

その復活にも結ばれますように。

また、復活の希望をもって眠りについたわたしたちの兄弟姉妹と、

あなたのいつくしみのうちに亡くなったすべての人を心に留め、

あなたの光の中に受け入れてください。

いま、ここに集うわたしたちをあわれみ、

神の母おとめマリアと聖ヨセフ、

使徒とすべての時代の聖人とともに、

永遠のいのちにあずからせてください。

手を合わせる。

御子イエス・キリストを通して、

あなたをほめたたえることができますように。

105 同じ教皇名がある場合、奉献文の中でも○世を加えて区別するのは日本の習慣です。現教皇は初めて「フランシスコ」を教皇名としているので、唱える際に○世はつけません。

共同司式ミサのとき、最後の「御子イエス・キリストを通して……」を主司式者が唱える場合が多いようですが、「また、復活の希望をもって眠りについた……」を唱えた共同司式司祭がこの部分も唱えます。

106 司祭はホスティアを載せたパテナとカリスを手に取り、高く掲げて唱える。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに、
聖霊の交わりの中で、
全能の神、父であるあなたに、
すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、

会衆ははっきりと唱える。

アーメン。

106 現行版では、司祭はパテナとカリスを「奉持して唱える」ですが、規範版に基づき、パテナとカリスを「手に取り、高く掲げて唱える」に変更されました。

『典礼聖歌』では、栄唱を歌唱する場合、会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるよう指示されています。そのため、歌唱しない場合も会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるのか、「アーメン」のみを唱えるのか、不統一が生じていました。改訂版では規範版に従い、栄唱を歌唱する場合も歌唱しない場合も、会衆は「アーメン」のみを唱えることになりました。

第三奉献文

107

司祭 主は皆さんとともに。

会衆 またあなたとともに。

司祭 心をこめて、

会衆 神を仰ぎ、

司祭 賛美と感謝をささげましょう。

会衆 それはとうとい大切な務め（です）。

典礼注記の指示に従って叙唱が続き、その結びに感謝の賛歌（サンクトゥス）を歌う。

聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主。

主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。

主の名によって来られるかたに賛美。

天には神にホザンナ。

108 司祭は手を広げて唱える。

まことに聖なる父よ、

造られたものはすべて、あなたをほめたたえています。

御子わたしたちの主イエス・キリストを通して、

聖霊の力強い働きにより、

すべてにいのちを与え、聖なるものとし、

たえず人々をあなたの民としてお集めになるからです。

日の昇る所から日の沈む所まで、

あなたに清いささげものが供えられるために。

109 手を合わせる。

そして、供えものの上に両手を伸べたまま唱える。

聖なる父よ、

あなたにささげるこの供えものを、
いま、聖霊によって聖なるものとしてください。

手を合わせる。

そして、パンとカリスの上に十字架のしるしをしながら唱える。

御子わたしたちの主イエス・キリストの
御からだと ☩ 御血になりますように。

手を合わせる。

キリストのことばに従って、いま、わたしたちはこの神秘を祝います。

110 次の式文中の主のことばは、その意味が伝わるように、とくにはっきりと唱える。歌う
場合は（である）を省く。

主イエスは渡される夜、

パンを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

パンを取り、
あなたに賛美と感謝をささげ、裂いて、
弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを取って食べなさい。
これはあなたがたのために渡される
わたしのからだ（である）。」

110 司祭はパンを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「パンを取り……」を唱えます。

パンを手にとって唱える現行版の式文の「割って」が、聖書の表現（一コリント 11・24、使徒言行録 2・42 など参照）に合わせて「裂いて」に変更されました。

聖別されたホスティアを会衆に示した後、パテナの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

111 そして続ける。

食事の後に

カリスを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

同じように杯を取り、
あなたに賛美と感謝をささげ、
弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを受けて飲みなさい。
これはわたしの血の杯、
あなたがたと多くの人のために流されて
罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。
これをわたしの記念として行いなさい。」

カリスを会衆に示した後、コルポラーレの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

110 ホスティアをパテナの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

111 司祭はカリスを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「同じように……」を唱えます。
「これをわたしの記念として行いなさい。」は、制定の叙述全体を締めくくることばであることを意識して唱えます。

カリスをコルポラーレの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

112 続いて、司祭は唱える。

信仰の神秘。

会衆は以下のいずれかのことばをはっきりと唱える。

主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。
再び来られるときまで。

または

主よ、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、
あなたの死を告げ知らせます。再び来られるときまで。

または

十字架と復活によってわたしたちを解放された世の救い主、
わたしたちをお救いください。

113 司祭は手を広げて唱える。

聖なる父よ、

わたしたちはいま、
御子キリストの救いをもたらす受難、復活、昇天を記念し、
その再臨を待ち望み、
いのちに満ちたこの聖なるいけにえを
感謝してささげます。

あなたの教会のささげものを顧み、
まことの和解のいけにえとして認め、受け入れてください。
御子キリストの御からだと御血によってわたしたちが養われ、
聖霊に満たされて、
キリストのうちに、一つのからだ、一つの心となりますように。

112 会衆の応唱は、規範版に従って3種類の中から選ぶことになりました。いずれも、復活した主キリストに向けられたことばであることが分かるように訳されました。

聖霊によってわたしたちを、
あなたにささげられた永遠の供えものとしてください。
選ばれた人々、神の母おとめマリアと聖ヨセフ、
使徒と殉教者、（聖〇〇〇〇、（その日の聖人または保護の聖人名））
すべての聖人とともに神の国を継ぎ、
その取り次ぎによってたえず助けられますように。

わたしたちの罪のゆるしとなるこのいけにえが、
全世界の平和と救いのためになりますように。
地上を旅するあなたの教会、

教皇〇〇〇〇、
わたしたちの司教〇〇〇〇、（協働司教および補佐司教の名を加えることができる）
司教団とすべての奉仕者を導き、
あなたの民となったすべての人の信仰と愛を強めてください。
あなたがここにお集めになったこの家族の願いを聞き入れてください。
いつくしみ深い父よ、
あなたの子がどこにいても、すべてあなたのもとに呼び寄せてください。

† 亡くなったわたしたちの兄弟姉妹、
また、み旨に従って生活し、いまはこの世を去ったすべての人を、
あなたの国に受け入れてください。
わたしたちもいつかその国で、いつまでもともにあなたの栄光にあずかり、
喜びに満たされますように。

手を合わせる。

わたしたちの主イエス・キリストを通して、
あなたはすべてのよいものを世にお与えになります。†

113 同じ教皇名がある場合、奉献文の中でも〇世を加えて区別するのは日本の習慣です。現
教皇は初めて「フランシスコ」を教皇名としているので、唱える際に〇世はつけません。

共同司式ミサのとき、最後の「わたしたちの主イエス・キリストを通して……」を主司式
者が唱える場合が多いようですが、「亡くなったわたしたちの兄弟姉妹……」を唱えた共同司
式司祭がこの部分も唱えます。

114 司祭はホスティアを載せたパテナとカリスを手に取り、高く掲げて唱える。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに、
聖霊の交わりの中で、
全能の神、父であるあなたに、
すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、

会衆ははっきりと唱える。

アーメン。

115 死者のためのミサがささげられる場合は、次の祈りを唱えることができる。

†（きょう、）この世からあなたのもとに召された

○○○○（名）を心に留めてください。

洗礼によってキリストの死にあずかった者が、
その復活にもあずかることができますように。

キリストは死者を復活させるとき、
滅びゆくわたしたちのからだを、
ご自分の栄光のからだに変えてくださいます。

また、亡くなったわたしたちの兄弟姉妹、
み旨に従って生活し、いまはこの世を去ったすべての人を、
あなたの国に受け入れてください。

114 現行版では、司祭はパテナとカリスを「奉持して唱える」ですが、規範版に基づき、パテナとカリスを「手に取り、高く掲げて唱える」に変更されました。

『典礼聖歌』では、栄唱を歌唱する場合、会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるよう指示されています。そのため、歌唱しない場合も会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるのか、「アーメン」のみを唱えるのか、不統一が生じていました。改訂版では規範版に従い、栄唱を歌唱する場合も歌唱しない場合も、会衆は「アーメン」のみを唱えることになりました。

わたしたちもいつかその国で、いつまでもともにあなたの栄光にあずかり、
喜びに満たされますように。

そのときあなたは、わたしたちの目から涙をすべてぬぐい去り、
わたしたちは神であるあなたをありのままに見て、
永遠にあなたに似るものとなり、
終わりなくあなたをたたえることができますのです。

手を合わせる

わたしたちの主イエス・キリストを通して、
あなたはすべてのよいものを世にお与えになります。†

第四奉献文

116 救いの歴史の要約を示すというこの奉献文の構造上の理由から、この奉献文の叙唱を他の叙唱と代えることはできない。

司祭 主は皆さんとともに。

会衆 またあなたとともに。

司祭 心をこめて、

会衆 神を仰ぎ、

司祭 賛美と感謝をささげましょう。

会衆 それはとうとい大切な務め（です）。

聖なる父よ、

あなたの偉大なわざをたたえ、感謝をささげることは、
まことにとうとい大切な務め（です）。

あなたは唯一のまことの神、

初めもなく終わりもなく、すべてを超えて光り輝くかた。

あふれる愛、いのちの泉、万物の造り主。

造られたものは祝福され、光を受けて喜びに満たされます。

数知れない天使は昼も夜もあなたに仕え、

栄光を仰ぎ見て絶え間なくほめたたえます。

わたしたちはこれに声を合わせ、

造られたすべてのものとともに、あなたをたたえて歌います。

聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主。

主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。

主の名によって来られるかたに賛美。

天には神にホザンナ。

117 司祭は手を広げて唱える。

聖なる父、偉大な神よ、あなたをたたえます。

あなたは、英知と愛によってすべてのわざを行われました。

ご自分にかたどって人を造り、

造り主であるあなたに仕え、造られたものをすべて治めるよう、

全世界を人の手におゆだねになりました。

人があなたにそむいて親しい交わりを失ってからも、

死の支配のもとにおくことなく、

すべての人があなたを求めて見いだすことができるよう、

いつくしみの手を差し伸べられました。

また、たびたび人と契約を結び、

預言者を通して、救いを待ち望むよう励ましてくださいました。

時が満ちると、あなたはひとり子を救い主としてお遣わしになりました。

聖なる父よ、あなたはこれほど世を愛してくださいましたのです。

御ひとり子は聖霊によって人となり、

おとめマリアから生まれ、

罪のほかは、

すべてにおいてわたしたちと同じものとなりました。

貧しい人には救いの福音を告げ、

とらわれ人には自由を、

悲しむ人には喜びをもたらし、

あなたの計画を実現するため、

死に身をゆだね、

死者のうちから復活して死を滅ぼし、

いのちを新しくしてくださいました。

わたしたちが自分に生きるのではなく、

わたしたちのために死んで復活されたキリストに生きるために、

父よ、御子は信じる者に最初のたまものとして

あなたのもとから聖霊を遣わしてくださいました。

聖霊は、世にあってキリストの救いを全うし、

聖なるものとするわざをすべて完成してくださいます。

118 手を合わせる。

そして、供えものの上に両手を伸べたまま唱える。

いつくしみ深い父よ、

聖霊によってこの供えものを聖なるものとしてください。

手を合わせる。

キリストが永遠の契約としてわたしたちに残された
この偉大な神秘を祝うために、

パンとカリスの上に十字架のしるしをしながら唱える。

主イエス・キリストの

御からだと ☩ 御血になりますように。

手を合わせる。

119 次の式文中の主のことは、その意味が伝わるように、とくにはっきりと唱える。歌う
場合は、(である)を省く。

聖なる父よ、

世にいる弟子を愛しておられたイエスは、
あなたから栄光を受ける時が来たことを知り、
彼らを限りなく愛されました。

パンを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

主イエスは、

食事をともにする間にパンを取り、
賛美をささげ、
裂いて、弟子に与えて仰せになりました。

119 司祭はパンを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「主イエスは……」を唱えます。

パンを手にとって唱える現行版の式文の「割って」が、聖書の表現（一コリント 11・24、使徒言行録 2・42 など参照）に合わせて「裂いて」に変更されました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを取って食べなさい。
これはあなたがたのために渡される
わたしのからだ（である）。」

聖別されたホスティアを会衆に示した後、パテナの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

120 そして続ける。

同じように

カリスを取り、祭壇上に少し持ち上げて続ける。

ぶどう酒の満ちた杯を取り、感謝をささげ、
弟子に与えて仰せになりました。

少し身をかがめて唱える。

「皆、これを受けて飲みなさい。
これはわたしの血の杯、
あなたがたと多くの人のために流されて
罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。
これをわたしの記念として行いなさい。」

カリスを会衆に示した後、コルポラーレの上に置き、手を合わせて深く礼をする。

119 ホスティアをパテナの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

120 司祭はカリスを手に取り、祭壇の上に少し持ち上げて「ぶどう酒の……」を唱えます。
「これをわたしの記念として行いなさい。」は、制定の叙述全体を締めくくることばであることを意識して唱えます。

カリスをコルポラーレの上に置いた後、日本の適応として、司祭はひざまずく代わりに手を合わせて深く礼をします。

121 続いて、司祭は唱える。

信仰の神秘。

会衆は以下のいずれかのことばをはっきりと唱える。

主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。
再び来られるときまで。

または

主よ、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、
あなたの死を告げ知らせます。再び来られるときまで。

または

十字架と復活によってわたしたちを解放された世の救い主、
わたしたちをお救いください。

122 司祭は手を広げて唱える。

聖なる父よ、
わたしたちはいま、あがないの記念をともに行い、
キリストの死と、陰府に下られたことを思い起こし、
その復活と、あなたの右に上げられたことを宣言します。
主が栄光のうちに来られる日を待ち望み、
あなたに受け入れられ、全世界の救いとなるこのいけにえ、
キリストの御からだと御血をささげます。

父よ、

あなたが教会にお与えになったこのいけにえを顧み、
この一つのパンと杯を分かち合うすべての人を、

121 会衆の応唱は、規範版に従って3種類の中から選ぶことになりました。いずれも、復活した主キリストに向けられたことばであることが分かるように訳されました。

聖霊によって一つのからだに集めてください。

キリストのうちにあって、

あなたの栄光をたたえる生きたささげものとなりますように。

父よ、

すべての人を心に留めてください。

その人々のために、この供えものをささげます。

教皇○○○○をはじめ、

わたしたちの司教○○○○、（協働司教および補佐司教の名を加えることができる）

司教団とすべての奉仕者、

ここに集う人々、

あなたの民と、神を求めるすべての人、

また、キリストを信じて亡くなった人、

あなただけがその信仰を知っておられる

すべての死者を心に留めてください。

いつくしみ深い父よ、

あなたの子であるわたしたちすべてを顧み、

神の母おとめマリアと聖ヨセフ、

使徒と聖人とともに、

あなたの国で、約束されたいのちに**あずからせてください**。

その国で、罪と死の腐敗から解放された宇宙万物とともに、

主キリストによって、あなたの栄光をたたえることができますように。

手を合わせる。

わたしたちの主イエス・キリストを通して、

あなたはすべてのよいものを世にお与えになります。

122 同じ教皇名がある場合、奉献文の中でも○世を加えて区別するのは日本の習慣です。現
教皇は初めて「フランシスコ」を教皇名としているので、唱える際に○世はつけません。

共同司式ミサのとき、最後の「わたしたちの主イエス・キリストを通して……」を主司式
者が唱える場合が多いようですが、「いつくしみ深い父よ……」を唱えた共同司式司祭がこの
部分も唱えます。

123 司祭はホスティアを載せたパテナとカリスを手に取り、高く掲げて唱える。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに、
聖霊の交わりの中で、
全能の神、父であるあなたに、
すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、

会衆ははっきりと唱える。

アーメン。

123 現行版では、司祭はパテナとカリスを「奉持して唱える」ですが、規範版に基づき、パテナとカリスを「手に取り、高く掲げて唱える」に変更されました。

『典礼聖歌』では、栄唱を歌唱する場合、会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるよう指示されています。そのため、歌唱しない場合も会衆は「すべての誉れと栄光は……」から加わるのか、「アーメン」のみを唱えるのか、不統一が生じていました。改訂版では規範版に従い、栄唱を歌唱する場合も歌唱しない場合も、会衆は「アーメン」のみを唱えることになりました。

交わりの儀（コムニオ）

124 主の祈り

司祭はカリスとパテナを置いてから、手を合わせ、たとえば次のようなことばで会衆を主の祈りに招く。

主の教えを守り、みことばに従い、つつしんで主の祈りを唱えましょう。

または

わたしたちにいのちの糧を与えてくださる天の父をたたえて祈りましょう。

または

主イエスは、神を父と呼ぶよう教えてくださいました。信頼をもって主の祈りを唱えましょう。

または

キリストのいのちを受けて一つになることができるよう、主の祈りをささげましょう。

司祭は手を広げて会衆とともに唱える。

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、

悪からお救いください。

交わりの儀 「交わりの儀」はラテン語で“Ritus communionis”です。“communio”ということばがもつ豊かな内容を表すため、表題に「コムニオ」を加えました。

124 主の祈りの招きの例文（青字の部分）を、日本固有の式文として掲載しました。

125 司祭は手を広げたまま一人で続ける。

いつくしみ深い父よ、すべての悪からわたしたちを救い、
世界に平和をお与えください。

あなたのあわれみに支えられて、罪から解放され、
すべての困難に打ち勝つことができますように。

わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。

手を合わせる。

会衆は次のことばをはっきりと唱えて祈りを結ぶ。

国と力と栄光は、永遠にあなたのもの。

126 教会に平和を願う祈り

司祭は手を広げてはっきりと唱える。

主イエス・キリスト、あなたは使徒に仰せになりました。
「わたしは平和を残し、わたしの平和をあなたがたに与える。」
主よ、わたしたちの罪ではなく、教会の信仰を顧み、
おことばのとおり教会に平和と一致をお与えください。

司祭は手を合わせる。

あなたはまことのいのち、すべてを導かれる神、世々とこしえに。

会衆は答える。

アーメン。

125 現行版の司祭のことばの「支えられ」に「て」が加えられ、神の恵みが与えられることによって罪から解放されることが表されています。会衆のことばは、主の祈りを日本聖公会と共同で翻訳したときに、この応唱も含めて翻訳し認可されたので、改訂版ではそれに合わせて現行版の「限りなく」が「永遠に」に変更されました。

126 現行版では司祭のことばの結びの「あなたはまことのいのち……」の部分が訳されていなかったもので、規範版に従って加えました。

127 平和のあいさつ

司祭は会衆に向かって手を広げ、次のことばを述べてから手を合わせる。

主の平和がいつも皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

128 状況に応じて、助祭または司祭は、次のように続ける。

互いに平和のあいさつを交わしましょう。

一同は平和と一致と愛を示すために、地域の慣習に従って互いにあいさつを交わす。司祭は助祭あるいは奉仕者とあいさつを交わす。

129 パンの分割

司祭はホステリアを取ってパテナの上で裂き、小片をカリスの中に入れて、静かに唱える。

いま、ここに一つとなる主イエス・キリストの御からだと御血によって、わたしたちが永遠のいのちに導かれますように。

130 平和の賛歌（アニュス・デイ）

パンが裂かれている間に、平和の賛歌（アニュス・デイ）を歌うか、または唱える。

世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに。

世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに。

世の罪を取り除く神の小羊、平和をわたしたちに。

パンを裂くために時間がかかる場合、何度か繰り返すことができる。最後に「平和をわたしたちに」で結ぶ。

130 「平和の賛歌」も他のミサの賛歌と同じように口語に変更され、ラテン語の表題が加えられました。現行版では会衆の最後の応唱は「平安を」ですが、直前の「主の平和」というあいさつのことばとの一貫性を考慮して「平和を」に変更されました。

131 拝領前の祈り

司祭は手を合わせて静かに唱える。

生ける神の子、主イエス・キリスト、
あなたは父のみ心に従い、聖霊の力に支えられ、
死を通して世にいのちをお与えになりました。
この聖なるからだと血によってすべての罪と悪からわたしたちを解放し、
あなたのおきてをいつも守り、
あなたから離れることのないようにしてください。

または

主イエス・キリスト、
あなたの御からだと御血をいただくことによって、
裁きを受けることなく、
かえってあなたのいつくしみにより、
心とからだを守られ、強められますように。

132 拝領前の信仰告白

司祭は手を合わせて深く礼をしてから、ホスティアを取り上げ、パテナあるいはカリスを添えて、会衆に向かってはっきりと唱える。

世の罪を取り除く神の小羊。
神の小羊の食卓に招かれた人は幸い。

続いて会衆とともに唱える。

132 規範版のひざまずく動作の代わりに、日本のための適応として司祭は手を合わせて深く礼をします。また、現行版では、ホスティアに添えるのはパテナだけでしたが、規範版に基づき、カリスを添えることもできるように変更されました。

規範版に基づいて、司祭のことばに「世の罪を取り除く神の小羊」を加えました。

主よ、わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません。
おことばをいただくだけで救われます。

または

主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、
あなたをおいてだれのところに行きましょう。

133 司祭の拝領

司祭は祭壇に向かい、静かに唱える。

キリストの御からだ、永遠のいのちの糧になりますように。

そしてキリストの御からだを拝領する。

続いて、カリスを手に取り、静かに唱える。

キリストの御血が、永遠のいのちの糧になりますように。

そしてキリストの御血を拝領する。

134 信者の拝領

その後、司祭はパテナまたはピクシス（チボリウム）を持って拝領者に近づく。そして、
ホステリアを取って拝領者一人ひとりに示して言う。

キリストの御からだ。

拝領者は答える。

アーメン。

そして拝領する。

助祭が授ける場合も同様にする。

132 現行版では、会衆のことばとして、規範版にあるマタイ 8・8 の百人隊長のことばに基づく式文の代わりにヨハネ 6・68 のペトロの信仰告白のことばに基づく日本固有の式文（青字）を用いてきました。改訂版では、規範版の式文も掲載して、いずれかを選ぶように変更されています。

135 両形態による拝領を行う場合は、定められた方法（「日本におけるミサ中の聖体拝領の方法に関する指針」参照）に従う。

136 司祭がキリストの御からだを拝領している間に、拝領の歌を始める。

137 聖体の授与が終わると、司祭、助祭、または祭壇奉仕者はカリスの上でパテナをふき、カリスをすすぐ。
その間に、司祭は静かに唱える。

主よ、口でいただいたものを清い心をもって受け入れることができますように。
このたまものによって、永遠のいのちに導かれますように。

138 その後、司祭は席に戻ることができる。拝領後、一同はしばらく聖なる沈黙のうちに祈る。
適当であれば、詩編か他の賛美の歌、もしくは賛歌を歌うことができる。

139 拝領祈願

司祭は祭壇または自分の席で会衆に向かって立ち、手を合わせて言う。

祈りましょう。

一同は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る。続いて、司祭は手を広げて拝領祈願を唱え、会衆はその結びにはっきりと唱える。

アーメン。

137 拝領の後、パテナをカリスの上でふくことが加わりました。また、選任された祭壇奉仕者もパテナをふき、カリスをすすぐことができるようになりました（「ローマ・ミサ典礼書の総則」192参照）。祭器をすすぐ場所は祭壇または祭器卓です。助祭あるいは選任された祭壇奉仕者は、祭壇ではなく祭器卓ですすぎます（「ローマ・ミサ典礼書の総則」183、192参照）。

138 日本のための適応として、拝領後、一同はしばらく沈黙のうちに祈ります。

139 規範版に基づき、司祭が拝領祈願を唱える場所が典礼注記に加えられました。日本のための適応として、司祭の招きのことばの後、一同はしばらく沈黙のうちに祈ります。

閉祭

140 お知らせ

必要があれば、会衆への短いお知らせが行われる。

141 派遣の祝福

続いて派遣が行われる。司祭は会衆に向かって手を広げて言う。

主は皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

司祭は会衆を祝福して唱える。

全能の神、父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にありますように。

会衆は答える。

アーメン。

142 一定の日や状況によっては、上記の祝福のことばの前に、典礼注記に従って他のより荘厳な祝福、あるいは「会衆のための祈願」が行われる（76 頁以下参照）。

141 ミサの結びに「荘厳な祝福」（76 頁以下）あるいは「会衆のための祈願」（86 頁以下）を用いる場合、「主は皆さんとともに」、「またあなたとともに」という対話句に続けて、助祭あるいは助祭が不在の場合は司祭自身が、「祝福を受けるために頭を下げて祈りましょう」と招きのことばを述べます。

142 規範版の巻末にある「ミサの結びの祝福と会衆のための祈願」が訳され、認証されたので（76 頁以下参照）、必要に応じて用いることができます。

143 司教が司式するミサでは、司式司教はミトラを着け、手を広げて言う。

主は皆さんとともに。

会衆は答える。

またあなたとともに。

司教は唱える。

主のみ名がいつもたたえられますように。

会衆は答える。

いまよりとこしえに。

司教は唱える。

主のみ名はわたしたちの助け。

会衆は答える。

主は天地の造り主。

バクルスを用いている場合、司教はここで受け取り、会衆の上に三度、十字架のしるしをしながら唱える。

全能の神、父と ✠ 子と ✠ 聖霊の ✠ 祝福が皆さんの上にありますように。

会衆は答える。

アーメン。

143 規範版第3版では、第2版には掲載されていなかった司教による派遣の祝福が加えられたので、改訂版にも規範版に基づいて翻訳し、掲載されています。司教がミサの結びに「荘厳な祝福」(76頁以下)あるいは「会衆のための祈願」(86頁以下)を用いる場合、141番の解説に従って行います。

144 閉祭のことば

助祭または司祭は手を合わせて会衆に向かって言う。

感謝の祭儀を終わります。

行きましょう、主の平和のうちに。

または

(感謝の祭儀を終わります。)

行きましょう、主の福音を告げ知らせるために。

または

(感謝の祭儀を終わります。)

平和のうちに行きましょう、日々の生活の中で主の栄光をあらわすために。

会衆は答える。

神に感謝。

145 退堂

開祭のときと同じように、司祭は祭壇に近づき、両手で祭壇に触れながら深く礼をして表敬する。その後、祭壇の前で奉仕者とともに手を合わせて深く礼をしてから退堂する。

146 他の祭儀が続く場合、派遣の式は省かれる。

144 規範版第3版が発行された後、2008年に典礼秘跡省によって「補遺」が発行され、新しい閉祭のことばが加えられました。これは、聖体に関するシノドス（世界代表司教会議）で提出された要望への対応です。（ ）内のことばは、状況に応じて省くことができます。

145 入堂のときと同じように、司祭・助祭による祭壇への表敬が加えられました。表敬の方法は日本のための適応で、開祭と同じです（15頁参照）。聖櫃が内陣にある場合、司祭・助祭による祭壇への表敬の後、司祭・助祭に他の奉仕者が加わって聖櫃の前で手を合わせて深く礼をします。この表敬の後、司祭・助祭と他の奉仕者は祭壇の前に行き、手を合わせて深く礼をしてから退堂します。

ミサの結びの祝福と会衆のための祈願

荘厳な祝福

以下の祝福は、ミサ、あるいはことばの典礼、教会の祈り（時課の典礼）、諸秘跡の祭儀の各結びに、司祭が任意で用いることができる。

助祭、あるいは助祭が不在の場合は司祭自身が、「祝福を受けるために頭を下げた祈りましょう」と招きのことばを述べる。続いて、司祭は会衆の上に両手を伸べて祝福のことばを唱え、会衆は「アーメン」と答える。

I 季節の祭儀

1 待降節

わたしたちはひとり子の到来を信じ、その再臨を待ち望んでいます。
全能の神、あわれみ深い父が、
近づいて来られるひとり子の輝きによって皆さんを聖なる者とし、
祝福で満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

日々の生活の中で、神が皆さんに揺るぎない信仰を与え、
希望をもって生きる喜びと、
尽きることのない愛で満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

救い主の栄光に満ちた再臨のとき、
神が皆さんに、永遠のいのちの恵みを豊かに与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にもありますように。

会衆 アーメン。

2 降誕節

いつくしみ深い神は、

イエスの栄光に満ちた誕生によって世の闇を取り除き、
この聖なる夜（日）を照らしてください。

神が皆さんを罪の暗闇から解放し、
御子の輝きで満たしてくださいように。

会衆 アーメン。

天使によって、
羊飼いに救い主の誕生を告げることをお望みになった神が、
皆さんの心を喜びで満たし、福音をのべ伝える者としてくださいますように。

会衆 アーメン。

ひとり子の受肉によって天と地を結んでくださった神が、
皆さんにみ心を行う恵みと平和を豊かに与え、
天の教会の喜びにあずからせてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

3 年の初め

あらゆる祝福の源である神が、
皆さんを豊かな恵みと祝福で満たし、
この一年を通してたえず見守ってくださいように。

会衆 アーメン。

神が、皆さんの信仰を清く保ち、
揺るぎない希望と最後まで耐え忍ぶ愛を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

神が、皆さんの生活と働きを平和のうちに保ち、
祈りを聞き入れ、永遠のいのちに導いてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

4 主の公現

闇から光に招いてくださった神が、
祝福を豊かに注ぎ、
信仰、希望、愛によって皆さんの心を強めてくださいますように。

会衆 アーメン。

皆さんが、きょう、世界を照らす光として現れたキリストに従い、
人々を照らす光となることができますように。

会衆 アーメン。

星に導かれ、まことの光キリストを見いだした博士たちのように、
皆さんも、喜びのうちに主キリストを見いだすことができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

5 主の受難

いつもしみ深い父から遣わされたひとり子は、
その受難によって愛の模範を示してくださいました。

皆さんが神と人々に仕えることによって、
豊かな祝福を受けることができますように。

会衆 アーメン。

キリストの死によって永遠の死から救われた皆さんが、
永遠のいのちにあずかることができますように。

会衆 アーメン。

皆さんが、自らを低くされたイエスにならい、
その復活の栄光とともにあずかることができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

6 復活節

ひとり子の復活によって皆さんをあがない、
ご自分の子としてくださった神が、
皆さんを祝福し、喜びで満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

すべての人をあがない、まことの自由を与えてくださった神が、
皆さんを祝福し、天の国を受け継ぐ者としてくださいますように。

会衆 アーメン。

信仰をもって洗礼を受け、新しいのちに満たされた皆さんが、
み心になう生活を送り、御父のもとに迎えられますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

7 主の昇天

きょう、御ひとり子を天に上げられた神が、
皆さんを祝福し、キリストのもとに導いてくださいますように。

会衆 アーメン。

復活の後、弟子たちに現れたキリストが、
再び来られるときも、
皆さんに変わることはないつくしみを示してくださいますように。

会衆 アーメン。

栄光のうちに御父のもとに座しておられるキリストが、
約束されたとおり、世の終わりまで皆さんとともにいてくださり、
救いの喜びを味わわせてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

8 聖霊

光の源である神は、
弟子たちに聖霊を注ぎ、その心を照らしてくださいました。
神が皆さんを祝福し、喜びで満たし、
聖霊のたまものを豊かに与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

弟子たちの上に注がれた聖霊の火が、皆さんをあらゆる悪から清め、
その輝きによって照らしてくださいますように。

会衆 アーメン。

ことばの異なる人々を唯一の信仰告白へと導いてくださった聖霊が、
皆さんの信仰を強め、希望を揺るぎないものとしてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

9 年間 一

神が皆さんを祝福し、守ってくださいますように。

会衆 アーメン。

神がみ顔の輝きで皆さんを照らし、恵みで満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

神がみ顔を皆さんに向け、その平和を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

10 年間 二

人の知恵をはるかに超える神の平和が、皆さんの心と思いを満たし、
御父とひとり子キリストを知り、
愛する恵みを与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、

父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

11 年間 三

いつくしみ深い神が皆さんを祝福し、

救いに導く知恵を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

神が信仰の恵みで皆さんを支え、

み心を行う恵みで満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

神が平和と愛の道を示し、

皆さんをご自分のもとに立ち返らせてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、

父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

12 年間 四

慰めの源である神が、世界をまことの平和に導き、

皆さんに祝福を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

神が、皆さんをあらゆる困難から解放し、

一人ひとりの心を、

愛のうちに揺るぎないものとしてくださいますように。

会衆 アーメン。

皆さんが、信仰、希望、愛のたまものを豊かに受け、

この世においてよいわざを行い、

永遠の喜びを見いだすことができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、

父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

13 年間 五

全能の神が、あらゆる困難から皆さんを守り、
いつくしみをもって祝福してくださいますように。

会衆 アーメン。

皆さんが神の語りかけを心から受け入れ、
変わる事のない喜びで満たされますように。

会衆 アーメン。

神が示してくださる正しい道を皆さんがいつも歩み、
神の国を受け継ぐことができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、

父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

14 年間 六

神が、天のあらゆる祝福で皆さんを満たし、
聖なる者、汚れのない者としてくださいますように。

会衆 アーメン。

神がその栄光を豊かに注ぎ、
真理のことばによって導き、救いの福音によって教え、
互いに愛し合う心を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、

父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

II 聖人の祭儀

15 聖母マリア

おとめマリアから生まれたひとり子によって、
全人類を救ってくださった神が、
皆さんに豊かな祝福を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

いのちの源である主キリストを産み育てたマリアの愛を、
皆さんがいつでも感じとることができますように。

会衆 アーメン。

聖母マリアの祝日に集まった皆さんが、
天の喜びと恵みで満たされますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

16 聖ペトロ 聖パウロ

ペトロの信仰告白を礎として教会を建ててくださった全能の神が、
皆さんに揺るぎない信仰を与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

ひるむことなく宣教に励んだパウロのように、
皆さんが、人々をキリストのもとに導くことができますように。

会衆 アーメン。

ペトロとパウロの殉教を記念する皆さんが、
二人の使徒の取り次ぎに支えられて信仰の道を歩み、
天の喜びにあずかることができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にもいつもありますように。

会衆 アーメン。

17 使徒

使徒たちを礎として教会を築いてくださった神が、
聖〇〇〇〇の取り次ぎを願う皆さんを、
祝福してくださいますように。

会衆 アーメン。

使徒たちの教えと模範によって教会を強めてくださる神が、
皆さんをキリストの証人としてくださいますように。

会衆 アーメン。

使徒たちの教えによって信仰を固めてくださった神が、
皆さんを永遠の住まいへと導いてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

18 聖人

聖人の誉れと喜びである神が、皆さんを豊かな祝福で満たし、
強めてくださいますように。

会衆 アーメン。

聖人の取り次ぎによって、皆さんがこの世の悪から解放され、
その聖なる生活を模範とし、
神と人々に心から仕える者となりますように。

会衆 アーメン。

地上を旅する教会が、天の集いに迎えられ、
すべての聖人とともに、永遠の喜びを味わうことができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

Ⅲ その他の祝福

19 教会献堂

きょう、献堂の祝いに招いてくださった神が、
皆さんを天の祝福で満たしてくださいますように。

会衆 アーメン。

すべての人を御子のうちに一つに集めてくださる神が、
皆さんを聖霊の神殿としてくださいますように。

会衆 アーメン。

清い心を与えてくださる神が、
皆さんをすべての聖人とともに、
永遠のいのちを受け継ぐ者としてくださいますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

20 死者

神は、限りないいつくしみによって人間を造り、
ひとり子の復活によって、人類に復活の希望を与えてくださいました。
慰めの源である神が、皆さんを祝福してくださいますように。

会衆 アーメン。

地上を旅するわたしたちの心がいやされ、
亡くなったすべての人に永遠のいのちが与えられますように。

会衆 アーメン。

キリストの復活を信じるわたしたちが、
主とともに終わりなく生きることができますように。

会衆 アーメン。

全能の神、
父と子と聖霊の祝福が ☩ 皆さんの上にいつもありますように。

会衆 アーメン。

会衆のための祈願

以下の祈願は、ミサ、あるいはことばの典礼、教会の祈り（時課の典礼）、諸秘跡の祭儀の各結びに、司祭が任意で用いることができる。

助祭、あるいは助祭が不在の場合は司祭自身が、次のような招きのことばを述べる。「祝福を受けるために頭を下げてください」。続いて、司祭は会衆の上に両手を伸べて祝福のことばを唱え、会衆は「アーメン」と答える。

その後、司祭はつねに次のことばを唱える。「全能の神、父と子と聖霊の祝福が ✠ 皆さんの上にいつもありますように」。会衆は「アーメン」と答える。

- 1 神よ、あなたの民にいつくしみを注いでください。
日々の生活をいつも見守り、永遠のいのちに導いてくださいますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 2 神よ、あなたの民を顧みてください。
キリストの福音を深く悟り、
日々の典礼の喜びを深めることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 3 神よ、あなたの民を祝福してください。
あらゆる過ちから守られ、一人ひとりの願いが実現しますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 4 神よ、あなたの民をまことの回心に導いてください。
罪をゆるされた民が、心からあなたを愛することができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 5 神よ、あなたの家族を照らしてください。
み心に従い、正しい行いに励むことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

- 6 神よ、あなたの民にゆるしと平和を与えてください。
あらゆる過ちを退け、
清い心であなたをたえず求めることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 7 神よ、あなたに従う民を顧み、
天の祝福で満たし、成長させてください。
たえずみ旨を行うことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 8 神よ、あなたの民にいつくしみを注いでください。
わたしたちが悪から解放され、心からあなたに仕え、
いつも恵みに守られて生きることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 9 神よ、あなたの家族を力づけてください。
救いのみわざを喜びのうちに祝ったわたしたちが、
その恵みにたえずこたえて生きることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 10 神よ、あなたの民をいつくしみのうちに守ってください。
あなたの祝福によって豊かにされ、
いつも感謝をもって喜びのうちに生きることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 11 神よ、あなたの家族に愛を注ぎ、支えてください。
あらゆる災いから守られ、
み心にかなう行いをもってあなたに仕えることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 12 神よ、あなたを信じる民の心とからだを清めてください。

聖霊の息吹に強められ、悪の誘惑に打ち勝ち、
あなたのいつくしみを味わうことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

13 神よ、あなたを信じる人々を祝福し、豊かな実りを与えてください。
一人ひとりの行いが、あなたの愛の力で支えられますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

14 神よ、あなたに従う民の願いを聞き入れ、強めてください。
あなたから離れては何もできないわたしたちが、
あわれみに支えられてなすべきことを悟り、
正義を行うことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

15 神よ、あなたに祈る民を助け、
人間の弱さを顧みてください。
あなたに仕える民が、心もからだもいやされて、
喜びを味わうことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

16 神よ、あなたの家族を顧み、
尽きることのないあわれみを注いでください。
あなたを離れては何もできないわたしたちが、
あなたのいつくしみによって救いの道を歩むことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

17 神よ、信じる者に救いの恵みを豊かに注いでください。
わたしたちがいまあるのは、あなたの恵みによるものです。
わたしたちが、思い、ことば、行いによって、
あなたを賛美することができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

- 18 神よ、あなたの民にいのちの道を示してください。
悪を退け、善を求め、
あなたのあわれみをいつも受けることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 19 神よ、あなたに希望をおくわたしたちを強めてください。
正しい信仰を保ち、
恵みに満たされた生活を送り、
約束された永遠のいのちを受け継ぐことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 20 神よ、あなたの民に愛といつくしみを注いでください。
あなたによって造られた民が、
あなたによって新たにされ、救われますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 21 神よ、あなたの民の愛を強めてください。
わたしたちが悔い改めのわざに励み、
あなたから命じられたことを喜んで果たし、
約束された救いの恵みを受けることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 22 神よ、あなたに従う民の弱さを顧みてください。
あなたの豊かな愛によって、
人の思いを越える恵みを受けることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 23 神よ、力強い右の手を差し伸べ、
あなたの家族を支えてください。
わたしたちがみ心に従い、
いつくしみに満ちた愛によってたえず守られますように。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

- 24 神よ、あなたの家族の祈りを聞き入れ、
必要な力と助けを与えてください。
たえずあなたの名をたたえることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 25 神よ、あなたの家族を見守り、
あわれみを注いでください。
天の知恵とたまものによって満たされますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 26 神よ、
あなたの民を力強い右の手で支え、
喜びで満たしてください。
キリストの弟子として生活し、
いまもいつも、あなたのいつくしみをたたえることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

聖人の祝日に

- 27 神よ、キリストを信じる民を喜びで満たしてください。
聖人を記念するわたしたちが、ともに永遠のいのちを受け継ぎ、
あなたの栄光をたえず賛美することができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
- 28 神よ、信じる民の心をいつもあなたに向かわせてください。
聖人の取り次ぎによってわたしたちを守り、
たえず助け、導いてください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

水の祝福と灌水

- 1 主日、とくに復活節の主日には、洗礼の恵みを思い起こすために、すべての教会堂と礼拝堂で、水の祝福と灌水を行うことができる。前日の土曜日の晩にささげられる主日のミサにおいても行うことができる。
ミサ中に行う場合は、初めの通常の回心の祈りの代わりに行われる。
- 2 司祭はあいさつの後、自席で立って会衆に向かい、これから祝福する水の入った器を前にして、たとえば次のようなことばで会衆を祈りに招く。

皆さん、神によって造られたこの水が祝福されるよう祈りましょう。
この水は、洗礼の恵みを思い起こすために、わたしたちの上に注がれます。
わたしたちが聖霊の導きに従って生きることができますように。

しばらく沈黙のうちに祈った後、司祭は手を合わせて以下の祈りを唱える。

全能永遠の神よ、
あなたは水を造り、
すべてにいのちを与え、清めてくださいます。
この水によって、わたしたちの心は罪から清められ、
永遠のいのちの恵みに満たされます。
いま、この水を祝福 ✠ してください。
わたしたちのうちにいのちの泉をわき出させ、
心とからだをあらゆる悪から守ってください。
清い心でみもとに近づき、
救いの恵みにふさわしくあずかることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。
会衆 アーメン。

または

いのちの源である神よ、
あなたは心とからだを生かしてくださるかたです。

いま、この水を祝福 ✠ してください。
信仰をもってこの水を用いるわたしたちの罪をゆるし、
すべての病と悪の誘惑からお守りください。
神よ、あなたのあわれみによって、
救いをもたらすいのちの水を、
いつもわたしたちのうちにわき出させてください。
あらゆる危険から守られ、
清い心でみもとに近づくことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。
会衆 アーメン。

復活節に

全能の神よ、
ここに集うあなたの民の祈りを聞き入れてください。
わたしたちは創造とあがないの神秘を思い起こします。
いま、この水を祝福 ✠ してください。
あなたは水を造り、大地を潤して豊かに実らせ、
すべてを清め、養ってくださいました。
あなたはまた、水によっていつくしみを示してくださいました。
イスラエルの民は海を渡って解放され、
荒れ野では渇きをいやされ、
あなたが人と結ぼうとされた新しい契約を、
預言者は水の働きによって告げ知らせ、
キリストはヨルダン川で水を清められました。
神よ、こうしてあなたは、
罪によって死に定められた人間を、
新しいいのちに導いてくださいます。
わたしたちがこの水によって自らの洗礼を思い起こし、
復活祭に洗礼を受けた人々とともに、
喜びを分かち合うことができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。

会衆 アーメン。

3 聖水に塩を混ぜることが適当と思われるなら、司祭は任意で塩を祝福することができる。

全能の神よ、

この塩を祝福 ✠ してください。

預言者エリシャは水に塩を混ぜて水を清めました。

この塩と水が注がれる所はどこでも、

あらゆる悪が退けられ、

そこにとどまる聖霊によってわたしたちが守られますように。

わたしたちの主イエス・キリストによって。

会衆 アーメン。

司祭は沈黙のうちに少量の塩を聖水に混ぜる。

4 続いて、司祭は祝福された水に右手をひたし、自らに十字架のしるしをする。その後、灌水器を取り、奉仕者と会衆に灌水する。適当なら、教会堂内を回って灌水する。その間、次の中から一つを歌う。あるいは他のふさわしい歌を歌う。

復活節以外のときに

交唱 1 (詩編 51・9)

ヒソブの枝でわたしの罪を払ってください、わたしが清くなるように。

わたしを洗ってください、雪よりも白くなるように。

交唱 2 (エゼキエル 36・25-26)

わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、

あなたがたは清められる。

わたしはあなたがたを、すべての汚れから清める。

わたしはあなたがたに新しい心を与える、と主は言われる。

賛歌 (一ペトロ 1・3-5 参照)

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、

ほめたたえられますように。

神は豊かなあわれみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、
死者の中からのイエス・キリストの復活によって、
生き生きとした希望を与え、
わたしたちのために天に蓄えられている、
朽ちることのない財産を受け継ぐ者としてくださいました。
終わりの時に救いを受けるために。

復活節に

交唱 1 (エゼキエル 47・1-2、9 参照)

わたしは神殿の右側から水がわき上がるのを見た。アレルヤ。
この水が流れる所では、
すべての人が救われて、声を上げる。アレルヤ、アレルヤ。

交唱 2 (ゼファニヤ 3・8、エゼキエル 36・25 参照)

わたしが立ち上がる日、わたしは諸国の民を集め、
もろもろの王国を呼び寄せる、と主は言われる。アレルヤ。
わたしは清い水をお前たちの上に振りかける。アレルヤ。

交唱 3 (ダニエル 3・77、79 参照)

泉と水に動くすべてのものよ、主を賛美せよ。アレルヤ。

交唱 4 (一ペトロ 2・9)

あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民です。
それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと
招き入れてくださったかたの力あるわざを、
あなたがたが広く伝えるためなのです。

交唱 5

キリストよ、あなたの脇腹から流れた水によって、
世の汚れが清められ、いのちが新たにされた。アレルヤ。

5 司祭は席に戻り、歌が終わると会衆に向かって立ち、手を合わせて唱える。

全能の神が、わたしたちを罪から清め、
この感謝の祭儀を通して、
天の国の食卓にあずかる恵みを与えてくださいますように。

会衆 アーメン。

または

全能の神、いつくしみ深い父がわたしたちの罪をゆるし、
永遠のいのちに導いてくださいますように。

会衆 アーメン。

6 続いて、定められているなら、一同は栄光の賛歌（グロリア）を歌うか唱える。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第 37 条第 1 項により、いっさい自由である。

新しい「ミサの式次第と第一～第四奉獻文」の変更箇所 2022 年 11 月 27 日（待降節第 1 主日）からの実施に向けて

2021 年 10 月 20 日 第 1 刷発行 日本カトリック司教協議会認可
2022 年 6 月 1 日 第 4 刷発行

編集 日本カトリック典礼委員会
発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館内
☎03-5632-4411(代表)、03-5632-4429(出版部)
<https://www.cbj.catholic.jp/>

印刷 三美印刷株式会社

© 2021 Catholic Bishops' Conference of Japan, Printed in Japan
ISBN978-4-87750-233-1 C0016

乱丁本・落丁本は、弊協議会出版部あてにお送りください
弊協議会送料負担にてお取り替えいたします